

令和 7 年度（2025 年度）

教育要項

関西医科大学大学院生涯健康科学研究科

目次

1. 教育理念・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	p.1
2. 研究科の名称および学位の名称・・・・・・・・	p.1
3. 教育課程の編成の考え方及び特色・・・・・・・・	p.1
(1) ディプロマ・ポリシー	
(2) カリキュラム・ポリシー	
(3) アドミッション・ポリシー	
4. 研究科の特色及び養成する人材像・・・・・・・・	p.3
5. 教育課程編成の考え方・・・・・・・・・・・・・・・・	p.4
6. 教育方法、履修指導、研究指導方法及び修了要件・・・・・・・・	p.7
7. 履修系統図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	p.12
8. 履修モデル・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	p.13
9. 修士論文スケジュール・・・・・・・・・・・・・・・・	p.14
10. 履修関連規程・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	p.15
関西医科大学学則	
関西医科大学大学院学則	
関西医科大学学位規程	
大学院生涯健康科学研究科履修規程	
資料	
指導教員の研究概要・・・・・・・・・・・・・・・・	p.18
シラバス・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	p.20

生涯健康科学研究科の概要

1. 教育理念

生涯健康科学研究科では、こどもから高齢者まで生涯にわたる最先端の健康科学の専門教育と研究に関する教育を行うことで、リハビリテーションのみならず保健・医療・福祉・教育分野に関する健康先進国の創造に貢献することを教育理念とする。

2. 研究科の名称および学位の名称

本研究科が、保健・医療・福祉分野において、対象者のライフステージに応じた支援ができる必要な知識と技術を兼ね備えた研究者を志す者及び高度専門職業人の育成を目的としていることから、研究科名称は、「生涯健康科学研究科 (Graduate school of Life Health Science)」とし、専攻名は「生涯健康科学専攻 (Department of Life Health Science)」とする。また、授与する学位の名称は、「修士 (生涯健康科学) Master of Life Health Science」とする。英訳名称については、国際的な通用性に留意し、以下の標記とする。

研究科名：生涯健康科学研究科 (Graduate school of Life Health Science)

専攻名：生涯健康科学専攻 (Department of Life Health Science)

学位：修士 (生涯健康科学) (Master of Life Health Science)

3. 教育課程の編成の考え方及び特色

本学では、医学部、看護学部、リハビリテーション学部を始め、大学院医学研究科、大学院看護学研究科及び附属医療機関を持つ医療系複合大学である。生涯健康科学研究科においては、修了後に人々の生涯における心身の健康、疾病予防、健康増進及び生活支援に関わり、“生命科学や医療技術等の発展は著しく、これらの成果を生涯を通じて学び、常に自らの知識・技術を磨き続け、患者や疾患の分析から病因や病態を解明するなどの研究マインドの涵養が求められており、医療系大学院には、生涯にわたる医療人のキャリア形成の中核的な役割を果たすことが求められる”「グローバル化社会の大学院教育～世界の多様な分野で大学院修了者が活躍するために～答申」(平成 23 年 1 月 31 日中央教育審議会)とあるように、生涯にわたり探求心を持つことのできる教養知識と医療に必要な幅広い知識を教授する。また附属医療機関との連携により科学的な根拠に基づく知識と技術を身につけることができるようこととする。

(1) ディプロマ・ポリシー

生涯健康科学研究科で育成する人材について、教育理念に基づきディプロマ・ポリシ

一を定める。

- 1) 保健・医療・福祉分野において高度な専門知識を修得する。
- 2) 心身の健康、疾病予防、健康増進及び生活支援等の領域において、人々の健康に関与する人材として保健・医療・福祉分野における役割を理解し、指導的立場に立ち多職種と連携できる。
- 3) それぞれの専門領域の発展のために、高度な技能を習得し、実践・研究課題について探求することができる。
- 4) 自ら専門領域における課題を発見し、課題解決を図ることができる。
- 5) 自立した研究者としての基盤となる基礎的研究能力・技術等の素養を身に付けている。

なお修了後の進路としては、理学療法士、作業療法士、言語聴覚士や民間企業等において人々の健康に関与する人材、及び研究者を志す人材が主に以下の分野で活躍することを想定している。

1. 病院、保健所等の保健医療機関
2. 省庁、地方自治体等の公共機関
3. 介護老人保健施設、介護老人福祉施設、児童福祉施設、訪問看護ステーション等の医療福祉施設
4. 特別支援学校等の教育機関
5. 研究機関
6. 企業の研究開発部門
7. 大学教員
8. 大学院博士後期課程への進学

(2) カリキュラム・ポリシー

生涯健康科学研究科では、ディプロマ・ポリシーの達成に向け、専門基礎科目と専門科目を学年進行に合わせて配置する。生涯における心身の健康、疾病予防、健康増進及び生活支援を学ぶ上でカリキュラム・ポリシーを定める。また、カリキュラム・ポリシー、ディプロマ・ポリシー及び各科目の関係を示す（履修系統図）。

- 1) 心身の健康、疾病予防、健康増進及び生活支援に関連する必修科目を配置する。
- 2) 人々の健康に寄与できるよう自身の専門領域のみならず関連分野の高度な知識を修得できる科目を配置する。
- 3) 保健・医療・福祉分野において、それぞれの専門領域の役割を理解し、高度専門職業人としての素養を養う科目を配置する。
- 4) 自身の専門分野において高度な専門的知識及び技能を習得できるよう専門基礎科

目を配置する。

- 5) 高度化・複雑化する社会において必要となる生活機能、心身機能、認知機能について高度な専門的知識を修得できる専門科目を配置する。
- 6) 研究を進める上で必要となる研究計画、研究実施などの能力を身に付ける科目を配置する。

(3) アドミッション・ポリシー

生涯健康科学研究科のディプロマ・ポリシーおよびカリキュラム・ポリシーを踏まえ、アドミッション・ポリシーを以下の通りとした。

- 1) 人々の健康に関与する人として必要とされる知識及び実践能力を習得するための基礎的能力を備えている人。
- 2) 保健・医療・福祉分野の諸課題について強い関心及び向上心を持つ人。
- 3) 様々な視点から多様化する保健・医療・福祉分野における課題を発見し、解決する探求心を持つ人。
- 4) 人々の健康に関与する人として高い倫理観を持ち、専門領域の発展に貢献する意欲のある人。

4. 研究科の特色及び養成する人材像

本学で育成する生涯健康科学研究科の人材像と、人材育成において欠かせない教育についての特色は、以下の通りである。

現在我が国では、住まい・医療・介護・予防・生活支援が一体的に提供される地域包括ケアシステムの構築が始まっている。一方で、“今後地域包括ケアシステムが推進されていくなかでこどもから高齢者に至る生涯を通じた予防・健康づくりを、社会を挙げて支える必要がある”（前述、保健医療 2035、p.26）ことから、今後、地域においてこどもから高齢者に至る生涯を通じた予防・健康づくりを推進するために、幅広い分野における専門職の連携や調整が必要となる。

現況の社会情勢及び今後の我が国の方針及び地域における課題を踏まえ、本学大学院では既設学部であるリハビリテーション学部における主な研究分野である理学療法学、作業療法学のみを大学院における研究分野として限定するのではなく、「生涯健康科学」、すなわち我が国が課題とする生涯における心身の健康、疾病予防、健康増進及び生活支援ととらえ、今後の我が国の保健・医療・福祉分野において貢献できる能力を有する理学療法士、作業療法士、言語聴覚士等や医療に関連する民間企業等において人々の健康に寄与する人材、すなわち以下に挙げる高度専門職業人及び研究者を養成する。

- ①理学療法士・作業療法士等の国家資格を持ち、高度な知識・技能を有する人

- ②保健・医療・福祉の場で指導的役割を担う人
- ③医療に関連する民間企業等において人々の健康に寄与する人
- ④研究者を目指す人

5. 教育課程編成の考え方

生涯健康科学研究科では、少子高齢化社会において、人々が心身共に健康な生活を送ることができるよう健康増進及び健康寿命の延伸に貢献できる人材を育成する。そのため広く医療・保健・福祉など健康に関わる学部卒業生及びそれらに関連する分野の就業者を対象に教育課程を編成する。「未来を牽引する大学院教育改革～社会と協働した「知のプロフェッショナル」の育成～（審議まとめ）」（平成 27 年 9 月 15 日中央教育審議会大学分科会）に述べられているように“学修課題に関して複数の科目等を履修するコースワークから確かな専門性を育む研究指導へ、有機的につながりを持った体系的な教育を組織的に展開する”こととする。

医療系学部（医学部、看護学部、リハビリテーション学部）及び医療系大学院（医学研究科、看護学研究科）を設置する本学の特色を活かし、本学生涯健康科学研究科では“こども”から“高齢者”まで生涯を通じた健康科学を基盤として、医療・保健・福祉の様々な視点から心身の健康創生を深く追求し、その理論構築および実践展開するための知識と専門的技能を修得する。

生涯健康科学研究科の教育課程は専門基礎科目、専門科目、研究科目により構成する。生涯健康科学研究科では「生体機能解析学領域」、「健康支援開発学領域」、「こどもとおとなの神経科学領域」、「こどもとおとなの生活科学領域」の計 4 領域を置く。それぞれの領域の大学院生が幅広く保健・医療・福祉に関する知識を習得でき、また自身の分野以外についても関連分野について学ぶことができるよう心身の健康、疾病予防、健康増進及び生活支援及び、こどもから高齢者までの生涯にわたる健康問題を、必修科目である「生涯健康科学特論」、「グローバルヘルスト論」で学ぶ。同様に修士論文の作成に必要、かつ研究者を目指すために必要な事項について「研究方法特論Ⅰ」、「研究方法特論Ⅱ」、「データアナリティクスト論」、「リサーチ・プレゼンテーション&アカデミック・ライティング」を必修科目とする。また生涯健康科学に関する専門的知識を修得できるよう「リハビリテーション教育学特論」、「心理学特論」、「基盤解剖生理学」、「生涯発達学特論」を置き、学生が自らの専門領域に必要な科目を、入学後の履修指導により選択する。また自身の進路に合わせて高度な技能を習得し、データを分析する演習科目を配置する。また専門科目において学生は自身の関心に応じ領域を選択し、専門基礎科目で学んだ研究法や研究倫理に基づくとともに科学的根拠に基づき、自身の関心のある領域における研究を深化させる。合わせて修士論文作成のスケジュールを指導教員と相談の上作成し、修士論文作成の指導を受ける。

1) 専門基礎科目

教育・研究者および理学療法士、作業療法士を始めとした保健・医療・福祉において臨床・研究の指導的役割を持つ高度専門職業人として、人間の健康を科学的にとらえ、多角的な視点からこどもから高齢者まで生涯にわたるこころとからだにアプローチするための基盤となる知識や研究方法論を幅広く学ぶ複数科目を配置する。

専門基礎科目では健康に関する科目を配置し、健康についての幅広い知識を教授すると同時に、自身の研究分野に関連する科目を選択科目とすることで、修士論文作成の一助とする。

心身の健康、疾病予防、健康増進及び生活支援等人々の生涯にわたる健康について、専門基礎科目に必修科目を置く。人々のこころとからだの健康について生涯を通じた予防・健康づくりを進める上で必要となる知識を修得するため「生涯健康科学特論」(2 単位) を置き、「グローバルヘルステ論」(1 単位) では日本を含む世界各国における健康問題等について理解を深める。

保健・医療・福祉分野において、人々の健康に寄与できる専門知識を修得できるよう選択科目を配置する。「基盤解剖生理学」(1 単位) では、人々の健康や健康支援を考える上で必要となる人体の構造及び機能について、「生涯発達学特論」(2 単位) では、胎児期から高齢期における運動機能と認知機能の発達について学ぶ。「研究方法特論Ⅰ」(1 単位)、「研究方法特論Ⅱ」(1 単位) では学術研究を進める上で必要となる研究倫理や個人情報の取扱い、研究不正等、研究を進める上で必要となる倫理を始め、研究計画から実施まで研究に必要な事項を学ぶ。また研究を進める上で必要となるデータの取扱いについては、「データアナリティクス特論」(2 単位) において人々の生体情報を得るための計測方法及びその解析のみならず計測したデータの取扱いについての統計的知識を養う。修士論文の作成については、「リサーチ・プレゼンテーション&アカデミック・ライティング」(1 単位) において修士論文の作成に必要な資料の作成等の技術のみならず、学術論文を作成するための表現について学ぶ。修士論文の作成に加え、研究者を志す学生も想定されることから、以上 4 科目を必修科目とする。

「リハビリテーション教育学特論」(1 単位) では教員・指導者(療法士)に求められる資質、能力及び職業倫理について学ぶ。「心理学特論」(2 単位) では心理学の基礎を学んだ上で、特に臨床で必要となる心理学の理論と知識を修得する。また地域包括ケアシステムの制度及び地域包括ケアシステムにおける多職種連携について学ぶため「地域包括ケア特論」(1 単位) を置く。理学療法士、作業療法士等の資格を持つ学生に対しては高度な専門的知識に加え、技術の習得を目的とし、本学附属医療施設において最先端の治療機器を用いた最適なりハビリテーションアプローチを学ぶために「高度医療技術演習Ⅰ」(2 単位) を置く。また、健康な生活が阻害された患者モデルを想定し、最先端の治療器及び解析装置を用いて高度な専門的知識及び技術を習得し、臨床推論に基づいた評価及びアプローチを「高度医療技術演習Ⅱ」(2

単位)で学ぶ。

2) 専門科目

科学的根拠に裏付けられた健康支援を体系的に展開するための高度な専門知識・技能を学ぶ。また、グローバルな視点で生涯健康科学領域の研究を推進するための専門的な方法論を専門科目における講義及び演習により修得する。

専門科目では、「生体機能解析学領域」、「健康支援開発学領域」、「こどもとおとなの神経科学領域」、「こどもとおとなの生活科学領域」に、それぞれ講義及び演習科目を設置し、それぞれの関心に応じて専門基礎分野の知識をもとに、専門的な知識を修得し、自身の修士論文の作成に備える。「生体機能解析学領域」では、疾病、外傷、加齢によって生じる運動障害の病態を運動学的、生理学的、解剖学的な観点から評価・解析する応用的手法を教授する。「健康支援開発学領域」では、心身機能や生活機能、行動学的・社会的側面から健康を包括的に捉え、人々の健康上の問題を自ら解決する支援策の展開について教授する。「こどもとおとなの神経科学領域」では、脳および精神の機能とその発達の障害を来す各年代の疾患を持つ対象者への支援方法を自ら見出すための知識と手法を教授する。「こどもとおとなの生活科学領域」では、身体や認知の発達や障害が生活に影響を与える要因を科学的に捉え、障害とともに生活していく視点から、福祉機器や義肢装具などの活用及び地域社会や多職種と協働して支援していくための方法を教授する。

また「グローバル化社会の大学院教育～世界の多様な分野で大学院修了者が活躍するために～答申」(前述、平成 23 年 1 月 31 日中央教育審議会)にあるように“学生がこれらの幅広い基礎的能力や俯瞰的なものの見方を修得した上で専門分野を選択し、それぞれの研究指導へと有機的につながるよう”専門科目の履修においては、学生が研究を進める分野と異なる領域の科目(特論)を履修するように指導し、修士論文作成において、幅広い視野に立って研究が進められるように指導する。

生体機能解析学領域には「生体機能解析学特論」(2 単位)及び「生体機能解析学演習」(2 単位)を置き、健康な生活の遂行を阻害する可能性のある生体機能の変化について理解を深めるとともに、非侵襲的検査方法を用いた計測方法及び計測結果の解釈と統計処理について学び、自身の研究テーマにふさわしい計測方法について技能を修得する。

健康支援開発学領域には「健康支援開発学特論」(2 単位)及び「健康支援開発学演習」(2 単位)を置き、ヒトの健康を心身機能や生活機能等さまざまな観点から包括的に理解し、健康上の問題を解決するための評価・支援及び理論構築について学び、学生の研究対象に応じた評価・測定法を選択し、具体的な健康支援について研究を進める。

こどもとおとなの神経科学領域には「こどもとおとなの神経科学特論」(2 単位)及び「こどもとおとなの神経科学演習」(2 単位)を置き、脳やこころの機能、発達及び障害について学び新たな評価方法や支援技法等について学び、学生自らが具体的な支

援について研究を進める。

こどもとおとなの生活科学領域には「こどもとおとなの生活科学特論」(2 単位)と「こどもとおとなの生活科学演習」(2 単位)を置き、生活障害の評価及び測定について学び、障害とともに生活する視点から福祉機器や義肢装具などの活用及び障がいがある人との協働に関する研究を進める。

3) 研究科目

研究科目「特別研究」では、リサーチクエスションの設定から修士論文の完成に至る研究活動を通して、生涯健康科学領域の課題を探究し、科学的に分析する能力および基礎的な研究遂行能力を修得する。

専門基礎科目及び専門科目で自身の研究分野に対する知識を深化させ、自身の研究課題を定めた上で、研究科目である「特別研究」では修士論文の指導を受け、完成を目指す。なお特別研究では研究課題に対するアプローチとして研究デザインを始め、倫理面、データ収集及び解析の適切さや妥当性について論文指導教員と適宜連携し、自立して研究が実施できるよう支援する。修士論文提出までのスケジュールは別途学生に通知する。

6. 教育方法、履修指導、研究指導方法及び修了要件

教育方法

1) 授業方法

本学生涯健康科学研究科における授業は、専門基礎科目、専門科目、研究科目それぞれの科目群の特性に応じて授業を行う。専門基礎科目では、専門科目及び研究科目に必要な基礎的知識を教授し、専門科目の修学に必要な理論や知識のみならず科学的根拠に基づき修学が継続できるよう倫理及び研究法について必要な事項を学ぶ。

専門科目では、学生それぞれの関心に応じそれぞれの領域における専門的知識を教授する。また研究科目では、学生が指導教員とともに自ら探究できる研究課題を定め、適切な指導を受けながら、修士論文を作成することに主眼を置く。

なお、専門基礎科目、専門科目においては講義、演習の形態を用い、職を持つ社会人大学院生も適切に修学できるように大学院設置基準第 14 条に定める教育方法の特例を適用し、主に 6 時限目以降(18 時 20 分～)に開講するなど、時間割を配慮する。なお、社会人大学院生については、有している職業等により個々の学生の事情が異なるため、入学試験の受験前に、研究指導を希望する教員との面談において、履修計画等について相談し、必要に応じて長期履修制度に基づき修了までの履修計画を検討する。授業の形態についてはいずれの形態においても科目の内容に応じて授業は共同形式やオムニバス形式とすることで学生が主体的に自ら定めた研究課題について取り組むことができることとする。

2) 研究の倫理審査体制

本学の倫理委員会での審査を経る。審査内容は、研究対象者に及ぼす負担、研究への協力ための手続き、個人情報保護のため方策、その他研究を実施する際に考慮すべき倫理的な問題・課題等である。

3) 修業年限

本学生涯健康科学研究科における修業年限については、2 年とするが、職業を有している等の事情がある場合は、予め修了計画を定めた上で研究科長が認めた場合、標準修業年限を 1 年延長し、教育課程を履修できる長期履修制度を設ける。

履修指導の方法

生涯健康科学研究科では、“こども”から“高齢者”まで生涯を通じた健康科学を基盤として、医療・保健・福祉の様々な視点から心身の健康創生を深く追求する。そのため研究領域が多岐にわたるため、理学療法士、作業療法士等医療関係の資格を持つ学生については、各々の学生が高度専門職業人としての知識及び技術が修得できるよう履修モデルを学生に提示する。

また、教育職・臨床現場で指導的役割を目指す大学院生も想定されるため、それぞれに履修モデルを提示し、履修指導を行う【別表】。研究者を志す修士課程修了後博士課程に進学する学生については、学生の研究領域等を勘案の上、研究者に必要となる科目を受講するように指導する。

生涯健康科学研究科における研究指導、修士論文提出、修了までのスケジュールは以下となっている。

①指導教員の決定

学生は入学試験の受験に際し、自身が研究指導を希望する教員との事前相談（必須）において、自身の研究テーマ等を相談し受験する。

②履修指導及び研究課題の決定（1 年次 4 月～7 月）

主指導教員は、入学後の履修ガイダンスにおいて、学生との面談に基づき、高度専門職業人の素養を養う科目及び研究を実施するに当り必要な科目等について、専門基礎科目、専門科目から履修すべき科目を指導する。学生は自身の研究テーマについて主指導教員と相談の上、研究課題、研究の進め方、指導教員の専門性や指導環境を勘案の上、研究課題を決定する。

③研究計画の立案及びその指導（提出）（1 年次 7 月）

学生は研究課題について研究計画を立案し、研究科委員会に研究計画書を提出する。研究計画書の提出に際して、学生は主指導教員、副指導教員と十分に相談し、主指導教員は研究方法、研究デザイン等研究の妥当性及び必要となる倫理的配慮について必要な指導を行う。

④中間発表（1 回目）1 年次（7 月）

学生は「特別研究」等において、研究の進捗及び現時点での研究成果を発表する。

参加者は生涯健康科学研究科の教員、大学院生等とし、学生はこれまでに立案した研究計画を取りまとめ発表する。学生は発表に対する指摘を受け追加の調査、分析等を行い引き続き研究を継続する。

⑤研究倫理審査とその指導（1 年次 8 月～）

学生は自身の研究計画を元に研究を遂行するために、「関西医科大学医学倫理審査委員会規程」に則り、必要に応じて倫理審査を受け、承認を得る。主指導教員、副指導教員は学生の研究計画を勘案の上、学生が倫理審査を受けるに際し必要な指導を行う。

⑥研究の遂行及びその指導（1 年次 8 月～）

学生は提出した研究計画に基づき研究を実施する。専門基礎科目における「研究方法特論Ⅰ」、「研究方法特論Ⅱ」、「データアナリティクス特論」を通じ研究方法やデータの取扱い等について学び、指導教員の指導の下、先行研究の調査を始め、データ収集及び解析等それぞれの研究課題に沿った研究手法で研究を進める。指導教員は「特別研究」等において学生の研究の進捗状況を確認し、研究計画を勘案し指導を行う。必要な場合は、研究計画の見直しを検討する。

⑦主査及び副査の決定（2 年次 10 月）

指導教員は、修士論文の審査として適切な教員（主査 1 名、副査 1 名）を決定し、研究科委員会で承認を得る。主査は本研究科の教授、副査は原則本研究科の専任教員とし、主査については評価の公平性と客観性を確保するため指導教員以外の教員とする。

⑧中間発表（2 回目）（2 年次 12 月）

研究科委員会は学生の研究の進捗及び中間発表時点までの研究成果を公開で開催する。中間発表の参加者は生涯健康科学研究科の全教員、大学院生、リハビリテーション学部 学生等とし、学生はこれまでの研究成果を取りまとめ発表する。主査及び副査は発表内容に関する問題点や解決方法について指導を行い、学生はそれらの指摘を受け追加の調査、分析等を行い引き続き論文作成に向けた研究を継続する。

⑨論文の作成及びその指導（2 年次 12 月～1 月）

学生は中間発表までの研究成果を元に修士論文の作成を開始し、中間発表における質疑及び主査、副査の指導を受け、論文をまとめる。主研究指導教員及び副研究指導教員は論文の作成について、論文の全体構成、資料・データの整理法、図表の作成など論文の完成に向けた指導を行う。

⑩論文の提出（2 年次 1 月）

学生は完成させた修士論文を所定の期日までに提出する。

⑪研究発表会（2 年次 2 月）

研究科委員会は修士論文の成果の発表の場として研究発表会を開催する。学生は

中間発表における質疑及び主査、副査の指導を踏まえた上で研究発表を行う。なお研究発表会の参加者は中間発表と同一とする。

⑫最終試験並びに合否判定（2 年次 2 月）

主査及び副査は提出された論文を審査し、論文の内容及び専門領域に関する最終試験を行い、その結果を研究科委員会に報告する。

⑬修士課程の修了及び学位の授与（2 年次 3 月）

研究科委員会は、主査及び副査に拠る修士論文の審査及び最終試験の判定結果並びに当該学生の単位取得状況により、修士課程修了についての合否を判定する。

4) 科目の評価

授業科目の評価は、試験の結果及び日常の学習状況（課題レポート、科目への参加意欲、プレゼンテーション等）を総合して次の基準により評価する。なお、評価に際してはカリキュラム・ポリシー及びディプロマ・ポリシーで定める到達目標や科目における評価方法を学生に公開する。

（1）成績は 100 点満点とし、60 点以上を合格とする。

（2）合格した科目には所定の単位を与える。

（3）科目評価は、秀、優、良、可、及び不可の表記としその区分は次のとおりである。なお可以上の評価について、科目の取得を認める。

（4）合格した科目については、再評価はしない。

5) 成績評価基準

点数	評価	評 価 基 準
90 点以上	秀	到達目標を達成し、特に優れた成績を示したもの
80 点以上 90 点未満	優	到達目標を達成し、優れた成績を示したもの
70 点以上 80 点未満	良	到達目標を達成し、妥当と認められる成績を示したもの
60 点以上 70 点未満	可	到達目標を達成し、合格と認められる最低限の成績を示したもの
60 点未満	不可	到達目標を達成していない

6) 修了要件

修了要件は、専門基礎科目から必修科目 5 単位を含む 14 単位以上、専門科目から 6 単位以上を取得し、特別研究 10 単位を取得し、研究発表会で修士論文を発表したのち、研究科委員会で修士論文の審査を受け最終試験に合格することとする。

なお、保健・医療・福祉分野についての幅広い知識を修得するため、専門科目の 6 単位については、履修する特論科目と別領域の特論科目を履修することとする。

修士論文等の審査基準については、以下の通りとする。

1. 研究目的が明確であり、学術的及び社会的意義を有していること。
2. 研究計画の立案に際し、先行研究がレビューされ自身の研究の背景を理解していること。
3. 研究目的に応じた適切な研究方法がとられ、倫理的配慮がなされていること。
4. データ収集及び調査が適切になされ、結果を解釈し、考察に矛盾がないこと。
5. 引用文献が適切に用いられていること。
6. 論文においてデータの整理がなされ、結果が図表等を用いて適切に示されていること。
7. 論文において、首尾一貫した構成となっており、結論が導き出されていること。

【カリキュラム・ポリシー】

(CP1) 心身の健康、疾病予防、健康増進及び生活支援に関連する必修科目を配置する

(CP2) 人々の健康に寄与できるよう自身の専門領域のみならず関連分野の高度な知識及び技術を修得できる科目を配置する。

(CP3) 保健・医療・福祉分野において、それぞれの専門領域の役割を理解し、高度専門職業人としての素養を養う科目を配置する。

(CP4) 自身の専門分野において高度な専門的知識及び技能を習得よう専門基礎科目を配置する

(CP5) 高度化・複雑化する社会において必要となる生活機能、心身機能、認知機能について高度な専門的知識を修得できる専門科目を配置する。

(CP6) 研究を進める上で必要となる研究計画、研究実施などの能力を身に付ける科目を配置する。

アドミッション・ポリシー
(AP1) 人々の健康に関与する人として必要とされる知識及び実践能力を習得するための基礎的能力を備えている人。
(AP2) 保健・医療・福祉分野の諸課題について強い関心及び向上心を持つ人。
(AP3) 様々な視点から多様化する保健・医療・福祉分野における課題を発見し、解決する探求心を持つ人。
(AP4) 人々の健康に関与する人として豊かな人間性と高い倫理観を持ち、専門領域の発展に貢献する意欲のある人。

科目（単位）		
専門基礎科目（14）必修5、選択必修9	専門科目（6）必修2、選択必修4	特別研究（10）
健康に関する科目を配置し、健康について幅広い知識を教授すると同時に、研究分野に関連する科目を選択科目とすることで修士論文作成の一助とする、	「生体機能解析学領域」「健康支援開発学領域」「こどもとおとなの神経科学領域」「こどもとおとなの生活科学領域」にそれぞれ講義及び演習科目を設置し、専門的な知識を習得し、自身の修士論文の作成に備える。	リサーチクエスションの設定から修士論文の完成までを通して生涯健康科学領域の課題を探究し、科学的に分析する能力を習得する。
・生涯健康科学特論 (CP1) (DP1)(DP2) ・グローバルヘルス特論 (CP1) (DP1)(DP2) ・研究方法特論Ⅰ (CP6) (DP4)(DP5) ・データアナリティクス特論 (CP6) (DP4)(DP5) ・リサーチ・プレゼンテーション&アカデミック・ライティング (CP6) (DP4)(DP5) ・基盤解剖生理学 (CP2) (DP1)(DP2)	・生体機能解析学特論 (CP5) (DP3)(DP4) ・健康支援開発学特論 (CP5) (DP3)(DP4) ・こどもとおとなの神経科学特論 (CP5) (DP3)(DP4) ・こどもとおとなの生活科学特論 (CP5) (DP3)(DP4)	
・研究方法特論Ⅱ (CP6) (DP4)(DP5) ・地域包括ケア特論 (CP3) (DP1)(DP2) ・リハビリテーション教育学特論 (CP3) (DP2) ・心理学特論 (CP2) (DP1)(DP2) ・生涯発達学特論 (CP2) (DP1)(DP2) ・高度医療技術演習Ⅰ (CP4) (DP3) ・高度医療技術演習Ⅱ (CP4) (DP3)		
	・生体機能解析学演習 (CP5) (DP3)(DP4) ・健康支援開発学演習 (CP5) (DP3)(DP4) ・こどもとおとなの神経科学演習 (CP5) (DP3)(DP4) ・こどもとおとなの生活科学演習 (CP5) (DP3)(DP4)	
	* DP（太字、下線）の記載は科目と特に強い関連をもつ DPの記載は科目と関連をもつ	

年次	セメスター	研究の流れ
1年次	前期	履修指導・研究課題の決定・研究計画の提出・倫理審査（～7月）
	後期	研究の遂行とその指導（8月～）
2年次	前期	主査・副査決定（10月）
	後期	論文作成・提出（1月）

中間発表（7月）

中間発表（12月）

研究発表会（2月）

最終試験（2月）

可否判定（2月）

修士課程の修了及び学位の授与（3月）

1・2通年 (DP4)(DP5)

ディプロマ・ポリシー
(DP1) 保健・医療・福祉分野において高度な専門知識を修得する。
(DP2) 心身の健康、疾病予防、健康増進及び生活支援等の領域において、人々の健康に関与する人材としての役割を理解し、指導的立場に立ち多職種と連携できる。
(DP3) それぞれの専門領域の発展のために、高度な技能を習得し、実践・研究課題について探究することができる。
(DP4) 自ら専門領域における課題を発見し、課題解決を図ることができる。
(DP5) 自立した研究者として基盤となる基礎的研究能力・技術等の素養を身に付けている。

修士論文スケジュール

事項	時期	
1．指導教員の決定		学生は入学試験の受験に際し、自身が研究指導を希望する教員との事前相談（必須）において、自身の研究テーマ等を相談し受験する。
2．履修指導及び研究課題の決定	1年次（4月）	主指導教員は、入学後の履修ガイダンスにおいて、学生との面談に基づき、高度専門職業人の素養を養う科目及び研究を実施するに 当り必要な科目等について、専門基礎科目、専門科目から履修すべき科目を指導する。学生は自身の研究テーマについて主指導教員 と相談の上、副指導教員、研究課題、研究の進め方、指導教員の専門性や指導環境を勘案の上、研究課題及び副指導教員を決定す る。
3．研究計画の立案及びその指導（提出）	1年次（4月～7月）	学生は研究課題について研究計画を立案し、研究科委員会に研究計画書を提出する。研究計画書の提出に際して、学生は主指導教 員、副指導教員と十分に相談し、主指導教員は研究方法、研究デザイン等研究の妥当性及び必要となる倫理的配慮について必要な指 導を行う。
4．中間発表（1回目）	1年次（7月）	学生は「特別研究」等において、研究の計画及び概要について発表する。参加者は生涯健康科学研究科の教員、大学院生等とし、学 生はこれまでの研究成果を取りまとめ発表する。学生は発表に対する指摘を受け必要に応じ研究計画を見直す。
5．研究倫理審査とその指導	1年次（8月～）	学生は自身の研究計画を元に研究を遂行するために、「関西医科大学医学倫理審査委員会規程」に則り、必要に応じて倫理審査を受 け、承認を得る。主指導教員、副指導教員は学生の研究計画を勘案の上、学生が倫理審査を受けるに際し必要な指導を行う。
5．研究の遂行及びその指導	1年次（8月～）	学生は提出した研究計画に基づき研究を実施する。専門基礎科目における「研究方法特論Ⅰ」、「研究方法特論Ⅱ」、「データアナ リティクス特論」を通じ研究方法やデータの取扱い等について学び、指導教員の指導の下、先行研究の調査を始め、データ収集及び 解析等それぞれの研究課題に沿った研究手法で研究を進める。指導教員は「特別研究」等において学生の研究の進捗状況を確認し、 研究計画を勘案し指導を行う。必要な場合は、研究計画の見直しを検討する。
7．主査及び副査の決定	2年次（10月）	主指導教員は、修士論文の審査として適切な教員（主査1名、副査1名）を決定し、研究科委員会で承認を得る。主査は生涯健康科学 研究科の教授、副査は原則生涯健康科学研究科の専任教員とし、主査については評価の公平性と客観性を確保するため指導教員以外 の教員とする。
8．中間発表（2回目）	2年次（12月）	研究科委員会は学生の研究の進捗及び中間発表時点までの研究成果を公開で開催する。中間発表の参加者は生涯健康科学研究科の全 教員、大学院生、リハビリテーション学部学生等とし、学生はこれまでの研究成果を取りまとめ発表する。主査及び副査は発表内容 に関する問題点や解決方法について指導を行い、学生はそれらの指摘を受け追加の調査、分析等を行い引き続き論文作成に向けた研 究を継続する。
9．論文の作成及びその指導	2年次（12月～1月）	学生は中間発表までの研究成果を元に修士論文の作成を開始し、中間発表における質疑及び主査、副査の指導を受け、論文をまとめ る。主指導教員及び副指導教員は論文の作成について、論文の全体構成、資料・データの整理法、図表の作成など論文の完成に向け た指導を行う。
10．論文の提出	2年次（1月）	学生は論文題目届を提出の上、完成させた修士論文を所定の1月末日までに提出する。
11．研究発表会	2年次（2月）	研究科委員会は修士論文の成果の発表の場として研究発表会を開催する。学生は中間発表における質疑及び主査、副査の指導を踏ま えた上で研究発表を行う。なお研究発表会の参加者は中間発表と同一とする。
12．論文審査並びに合否判定	2年次（2月）	主査及び副査は提出された論文を審査し、論文の内容及び専門領域に関する最終試験を行い、その結果を研究科委員会に報告する。
13．修士課程の修了及び学位の授与	2年次（3月）	研究科委員会は、主査及び副査に拠る修士論文の審査及び最終試験の判定結果並びに当該学生の単位取得状況により、修士課程修了 についての合否を判定する。

関西医科大学学則、関西医科大学大学院学則、関西医科大学学位規程については、公示後教育要項に追加し、KMULAS の掲示板にアップロードします。

○関西医科大学大学院生涯健康科学研究科履修規則

(趣旨)

第1条 この規程は、関西医科大学大学院学則（以下「学則」という。）第14条の規定に基づき、生涯健康科学研究科（以下「研究科」という。）の授業科目及び履修方法等に関して必要な事項を定める。

(領域)

第2条 修士課程に、研究分野に応じた各領域を置く。

2 前項に定める各領域は、別表1のとおりとする。

(指導教員)

第3条 研究科では、学生ごとに、当該学生の履修、研究及び論文の指導等を行う指導教員を定める。

2 前項に定める指導教員のうち、原則として当該学生が専攻する研究領域の教授、及び准教授を主指導教員とする。ただし、必要があるときは、大学院生涯健康科学研究科委員会（以下、「研究科委員会」という。）で認めた教員をもって主指導教員に充てることができる。

3 前項に定める主指導教員に加え、副指導教員を置くことができる。

4 主指導教員及び副指導教員は研究科委員会が決定する。

5 主指導教員の変更は、原則として認めない。ただし、特別の事情が生じた場合に限り、研究科委員会の議を経て生涯健康科学研究科長（以下「研究科長」という。）がこれを認めるものとする。

(授業の方法)

第4条 授業は、講義、演習若しくは実習のいずれかにより又はこれらの併用により行うものとする。

(授業時間)

第5条 授業時間は、次のとおりとする。ただし、必要に応じ、これを変更して授業を行うことがある。

1時限 9:00～10:30 2時限 10:40～12:10

3時限 13:20～14:50 4時限 15:00～16:30

5時限 16:40～18:10 6時限 18:20～19:50

7時限 20:00～21:30

(授業科目、配当年次及び単位数)

第6条 授業科目、配当年次及び単位数は別表2に定める。

(単位の計算)

第7条 授業科目の単位修得時間は、次の算出方法による。

(1) 講義及び演習については、15時間から30時間の授業をもって1単位とする。

(2) 実習については、30時間から45時間までの授業をもって1単位とする。

(3) 講義、演習又は実習のうち二以上の方法により行う場合については、その組み合わせに応じ、前二号に規定する基準を考慮した授業時間をもって1単位とする。

(履修手続)

第8条 学生は、履修しようとする授業科目について、主指導教員の指導のもとに、当該年次初めの所定の期日までに履修届を提出するものとする。

2 履修届提出後、履修科目の追加及び変更は原則として認めない。ただし、特別の理由があるときは、主指導教員と当該担当教員の承認を得て研究科委員会に変更を願い出ることができる。

(成績評価)

第9条 成績の評価は、当該授業科目時間の3分の2以上の出席者を対象に、試験の結果、受講態度等を総合的に勘案して行う。

2 前項に定める試験は、レポートその他の方法をもって代えることができる。

3 各科目の成績評価は100点満点で行い、60点以上を合格とし、単位を認定する。

4 授業科目の成績は、秀・優・良・可・不可の評語をもって表し、秀（90点以上100点満点）、優（80点以上90点未満）、良（70点以上80点未満）及び可（60点以上70点未満）を合格とし、不可（60点未満）を不合格とする。

(成績評価に関する異議)

第10条 学生は各科目の成績評価について、異議を申し立てることができる。

2 異議申し立てに関する手続きについては、別途定める。

（課程の修了要件）

第11条 修士課程の修了要件は、当該課程に2年以上在籍し、以下の所定の授業科目を修得し、かつ、必要な研究指導を受けた上、学位論文の審査及び最終試験に合格することを必要とする。

- ・専門基礎科目 必修科目 5 単位を含む 14 単位以上
- ・専門科目 6単位以上。専門科目については演習科目と同一の領域の特論科目を履修した上で、別の領域の特論科目を履修すること。
- ・特別研究 10単位

（その他）

第12条 この規程に定めるもののほか、必要な事項については、研究科委員会の議を経て研究科長が別に定める。

（規程の改廃）

第13条 この規程の改廃は、研究科委員会の議を経て、学長が決定する。

附 則

本規程は、令和7年4月1日より施行する。

別表 1

領域
生体機能解析学領域、健康支援開発学領域、こどもとおとなの神経科学領域、こどもとおとなの生活科学領域

別表 2

（修士課程）

科目区分	授業科目	配当年次	単位数	
			必修	選択
専門基礎科目	生涯健康科学特論	1 前	2	
	グローバルヘルス特論	1 前	1	
	研究方法特論Ⅰ	1 前	1	
	研究方法特論Ⅱ	1 後	1	
	データアナリティクス特論	1 前	2	
	リサーチ・プレゼンテーション &アカデミック・ライティング	1 後	1	
	地域包括ケア特論	1 後		1
	リハビリテーション教育学特論	1 後		1
	心理学特論	1 後		2
	基盤解剖生理学	1 前		1
	生涯発達学特論	1 後		2
	高度医療技術演習Ⅰ	1 後		2
	高度医療技術演習Ⅱ	1 後		2
専門科目	生体機能解析学特論	1 前		2
	健康支援開発学特論	1 前		2
	こどもとおとなの神経科学特論	1 前		2
	こどもとおとなの生活科学特論	1 前		2
	生体機能解析学演習	2 前		2
	健康支援開発学演習	2 前		2
	こどもとおとなの神経科学演習	2 前		2
	こどもとおとなの生活科学演習	2 前		2
研究科目	特別研究	1 ～ 2 通	1 0	

指導教員の研究概要

・ 生体機能解析学領域

飯田寛和	・ 筋・骨格系機能解剖学と関節疾患の機能障害に関する研究 ・ 健康増進のためのデバイス、サービス開発 ・ 股関節疾患の新規治療開発
市橋則明	・ 運動器系理学療法に関する臨床的研究およびバイオメカニクス的研究 ・ ストレッチングと筋力トレーニングに関する研究 ・ 医用画像（超音波・MRI）解析による筋腱複合体の形態学的研究 ・ 関節の制御機構と筋機能に関する基礎的および臨床的研究
佐藤春彦	・ 生体センシング技術を活用した姿勢運動評価に関する研究 ・ 生体センシング、機械学習を駆使した障害児のコミュニケーション支援に関する研究 ・ 乳幼児の運動発達に関するバイオメカニクス的研究 ・ 障害予防・運動発達支援を目指したライフログの活用に関する研究
中野治郎	・ がんリハビリテーションに関する臨床研究 ・ 腫瘍に対する運動療法の効果に関する実験的基礎研究 ・ リハビリテーションに関する文献的研究：システマティックレビューの作成 ・ 物理療法の新たな効果・適応に関する探索的研究 ・ がんサバイバーを対象としたアンケート調査
前澤仁志	・ 非侵襲的脳機能計測によるヒト感覚運動制御機構に関する研究 ・ 経頭蓋電気刺激による中枢神経機能の変調とパフォーマンス改善に関する研究 ・ 嚥下・発話機能の神経生理学的手法を用いた研究

・ 健康支援開発学領域

池添冬芽	・ フレイル・サルコペニア・ロコモティブシンドロームに関する臨床研究 ・ 高齢者に対する身体機能評価手法および運動トレーニング法の開発 ・ 高齢者の骨格筋特性・運動機能および活動に関する臨床研究
野村卓生	・ ダイアベティス理学療法に関する研究 ・ 労働者の運動器障害を予防する産業理学療法研究 ・ 先端機器を用いた運動療法の効果検証に関する研究 ・ ウェアラブルデバイスを用いた24時間行動に関する研究 ・ リハビリテーション領域におけるデジタルバイオマーカーの開発
浅井剛	・ 小型慣性センサを用いた歩行解析に関する研究 ・ 地域高齢者における転倒リスク要因の探索 ・ 転倒恐怖感が運動機能に及ぼす影響に関する研究 ・ 理学療法評価機器の開発および研究
福元喜啓	・ 超音波画像装置を用いた、高齢者および運動器疾患患者における筋・関節の特性解析に関する研究 ・ 画像解析や生体電気インピーダンス法による新たな筋特性評価方法に関する研究 ・ 高齢者の身体機能評価方法と健康支援方法の開発に向けた、地域在住高齢者のコホート研究

・こどもとおとなの神経科学領域

吉村匡史	・精神疾患患者、健常者を対象とした脳波による脳機能評価 ・精神疾患のリハビリテーション
種村留美	・高次脳機能障害の評価技法開発 ・高次脳機能障害のリハビリテーション ・高次脳機能障害、認知症のICTを用いた在宅支援
三木恵美	・がん患者/サバイバーに対するリハビリテーションに関する研究 ・がん患者・サバイバーの就労支援に関する研究 ・地域在住高齢者のフレイル予防とWell-beingに関する研究 ・終末期患者に対する作業療法のアウトカム評価に関する研究

・こどもとおとなの生活科学領域

福井信佳	・福祉機器、義肢装具等の開発・評価に関する研究 ・障がいのある人の職場定着に関する研究
加藤寿宏	・神経発達症児のリハビリテーションの効果研究 ・神経発達症児の感覚と運動に関する臨床評価の開発 ・学校作業療法に関する臨床研究 ・小児リハビリテーションの臨床研究
松島佳苗	・神経発達症児の協調運動の定量的指標開発 ・生理指標を用いた神経発達症児の感覚特性理解 ・小児がんの作業療法 ・地域における子育て支援と作業療法
中山淳	・治療器および解析機器を駆使した評価・アプローチ方法の研究を行う ・患者モデルを想定し、最先端の三次元動作分析装置、表面筋電図、脳波計などを用いて分析を行う ・運動機能障害に関する臨床研究を行う ・義肢装具を用いた介入方法の検討 ・新たな義肢装具の研究開発を行う

科目名	生涯健康科学特論	科目区分	専門基礎科目	開講年次	1年次
講義形式	講義	必/選	必修	開講学期	前期
開講 キャンパス	牧野キャンパス	担当教員 (カナ)	◎イヅ イトメ, タヱムラミ, ヨシムササミ		
単位	2	担当教員 (漢字)	◎池添冬芽, 種村留美, 吉村匡史		
講義概要	急速に進む少子高齢化等の社会情勢の変化に伴い、保健・医療・福祉分野において、人々の心身の健康に対して多角的な視点から科学的にアプローチする必要性が高まっている。本科目では、人間のこころとからだの健康に関する基礎知識についての理解を深め、こどもから高齢者に至る生涯を通じた予防・健康づくりに関する理論や方法論について幅広く学び、生涯健康科学の学問領域を俯瞰する。また、生涯健康科学を多面的に追究し、科学的根拠に基づく健康科学の実践の基盤となる能力および多職種と協働してリーダーシップを発揮できる資質を身につけることを目指す。				
到達目標	1.生涯健康科学の概念について理解し,説明することができる 2.ヒトの生涯にわたる健康問題について概説することができる 3.こころとからだの健康づくりを実践する上で必要な知識・技術について説明できる 4.科学的根拠に基づく健康支援戦略について多角的視点から考えることができる 5.健康問題を解決するにあたっての多職種連携の意義について理解し, 説明することができる				
講義方法	講義はパワーポイントのスライド提示を中心に行う。				
アクティブラーニングの有無			無し		
備考					
成績評価 方法	評価基準・その他				
	レポートにて評価する（100％）				
テキスト	指定しない				
参考書	国際リハビリテーション学（河野眞編、羊土社）、リハビリテーション総論（椿原彰夫、診断と治療社） 老年学 第5版、大内尉義（編集）、医学書院、2021. どう向き合う!? 高齢者の認知機能、牧迫飛雄馬（編集）、文光堂、2019.				
事前事後 学習	授業で指示した内容について事前事後学習を行うこと 各回ごとに予習、復習ともに1時間以上の学習が必要				
オフィスアワー・連絡先			KMULASに記載されている科目責任者に事前にメールで問い合わせること。		
講義計画					
回数	学習内容			教員名	
第1回	生涯健康科学概説			池添 冬芽	
第2回	高齢者の健康問題			池添 冬芽	
第3回	加齢に伴う身体機能の変化			池添 冬芽	
第4回	高齢者の身体機能に対する評価・介入			池添 冬芽	
第5回	介護予防における多職種連携			池添 冬芽	
第6回	介護予防におけるマネジメント			池添 冬芽	
第7回	多職種連携とリーダーシップ①			池添冬芽,ゲストスピーカー （日本理学療法士協会所属理学療法士）	
第8回	多職種連携とリーダーシップ②			池添冬芽,ゲストスピーカー （前日本作業療法士協会会長、病院副院長）	
第9回	リハビリテーションサービスの種類（医学リハ、教育リハ、職業リハ、社会リハ）			種村 留美	
第10回	ICFとリハビリテーション連携			種村 留美	
第11回	我が国における子供から大人までのヘルスプロモーション			種村 留美	
第12回	世界に見るこどもからおとなまでのヘルスプロモーション			種村 留美	
第13回	加齢に伴う認知機能の変化および高齢者の認知機能に対する評価・介入			吉村 匡史	
第14回	加齢に伴う心理的变化			吉村 匡史	
第15回	世代別のメンタルヘルス			吉村 匡史	

科目名	グローバルヘルス特論	科目区分	専門基礎科目	開講年次	1年次
講義形式	講義	必/選	必修	開講学期	前期
開講 キャンパス	牧野キャンパス	担当教員 (カナ)	◎タネムリ、フカイノヨシア、サイヨシ		
単位	1	担当教員 (漢字)	◎種村留美, 福井信佳, 浅井剛		
講義概要	生涯健康科学では、こどもから高齢者までの生涯に亘った健康問題を課題とするが、さらにグローバルな課題についても本授業では追求する。具体的には本邦と世界各国の健康問題や健康格差などについて文献的な調査研究（海外での医療・保健・福祉・教育体験およびボランティア体験等を含む）、プレゼンテーションとディスカッションを行い問題解決能力を高める。ライフステージに合わせた健康づくりに関しては世界共通の課題であり、社会保障や保健医療、介護・福祉サービスなどのグローバルな課題に焦点を充て、将来的なグローバルヘルスリーダー育成を目指す。				
到達目標	1. 世界各国の健康問題について文献的な調査研究ができる 2. 各課題における国際的な取り組みを挙げて分析することができる 3. 自身の研究と世界における国際的な課題とを関連付けて説明できる				
講義方法	講義とアクティブラーニング				
アクティブラーニングの有無			あり		
備考					
成績評価 方法	評価基準・その他				
	レポート50%とプレゼン50%で評価する				
テキスト	指定しない				
参考書	国際リハビリテーション学（河野真編、羊土社）				
事前事後 学習	事前：世界の健康問題について複数の文献検索を行っておく。少なくとも1時間以上の事前の学習を行う。 事後：自分の研究を国際的な課題と関連付ける。少なくとも1時間以上の事後学習を行う。				
オフィスアワー・連絡先			KMULASに記載されている科目責任者に事前にメールで問い合わせること。		
講義計画					
回数	学習内容			教員名	
第1回	我が国と世界の社会保障政策			種村 留美	
第2回	国際リハビリテーションの実際			福井 信佳	
第3回	国際協力プロジェクト立案と分析			種村 留美	
第4回	医療キャリアデザイン（自身の研究と国際課題との関連）			福井 信佳	
第5回	我が国と世界の疾病構造の変化と医療モデル			浅井 剛	
第6回	世界人口の推移と高齢化			浅井 剛	
第7回	介護分野におけるNGO活動の実際			浅井 剛	
第8回	グローバルヘルス領域における日本人セラピストの役割			浅井 剛	

科目名	研究方法特論Ⅰ	科目区分	専門基礎科目	開講年次	1年次
講義形式	講義	必/選	必修	開講学期	前期
開講 キャンパス	牧野キャンパス	担当教員 (カナ)	◎ムツタケ		
単位	1	担当教員 (漢字)	◎野村卓生		
講義概要	研究活動は、社会からの信頼と負託の上に成り立っているため誠実に実施する必要がある。その認識のもとに、研究者自身は積極的に研究倫理を遵守し、所属機関は研究者が誠実な研究活動を実施できるよう研究環境を管理し、研究者への教育に対する取り組みを行っている。しかしながら研究結果の捏造や改ざん、不適切なオーサーシップといった研究不正は後を絶たない。こうした課題の解消には、研究者自らが研究倫理への理解を深めることは当然であるが、研究機関が責任をもって教育に取り組むことが重要である。この科目では大学院生が責任ある研究活動を行うための規範を涵養することを目指す。				
到達目標	1. 研究活動を行う際を守るべき倫理・規範の基本概念、研究者の責任について説明することができる。 2. 研究倫理の必要性と研究倫理に関する法律・行政ガイドラインの概要について説明することができる。 3. 研究活動における不正行為とその対応について説明することができる。 4. 研究活動における著作権管理、個人情報管理、利益相反管理について説明することができる。 5. 本学における研究倫理審査体制と研究倫理審査申請手順について説明することができる。				
講義方法	講義はPowerPointのスライド提示を中心に行う。				
アクティブラーニングの有無		無し			
備考	授業では個人情報を取り扱うことがある。情報の取り扱いには十分に留意すること。				
成績評価 方法	評価基準・その他				
	授業内平常評価（小テスト）：40%、レポート：60%				
テキスト	講師作成資料を配布する。				
参考書	1. 神里 彩子、武藤 香織『医学・生命科学の研究倫理ハンドブック 第2版』東京大学出版会2023 2. 飯嶋 久志、氏原 淳、他『研究倫理審査と申請 第2版 ～適正な臨床・疫学研究に向けて～』薬事日報社2023 3. TMI総合法律事務所『個人情報管理ハンドブック 第5版』商事法務2023 4. 渡邊 涼介『データ利活用とプライバシー・個人情報保護』青林書院2023				
事前事後 学習	各回の講義内容について十分な復習を行うこと（週3時間以上）。 研究者行動規範教育（eAPRIN）を修了すること（5時間）。				
オフィスアワー・連絡先		KMULASに記載されている科目責任者に事前にメールで問い合わせること。			
講義計画					
回数	学習内容			教員名	
第1回	学術研究における公正と責任ある研究活動			野村 卓生	
第2回	研究倫理の必要性と研究倫理に関する法律・行政ガイドライン			野村 卓生	
第3回	研究活動における不正行為への対応等に関するガイドラインと不正事例			野村 卓生	
第4回	研究活動における著作権管理の実際			野村 卓生	
第5回	個人情報の適切な取り扱いと個人情報管理の実際			野村 卓生	
第6回	研究費の適切な取り扱いと利益相反管理の実際			野村 卓生	
第7回	研究倫理教育と研究費の使用に関わるコンプライアンス教育の実際			野村 卓生	
第8回	本学における研究倫理審査体制と研究倫理審査申請手順			野村 卓生	

科目名	研究方法特論Ⅱ	科目区分	専門基礎科目	開講年次	1年次
講義形式	講義	必/選	必修	開講学期	後期
開講 キャンパス	牧野キャンパス	担当教員 (カナ)	◎タネムリミ, アサツヨシ, フクモトヒロ		
単位	1	担当教員 (漢字)	◎種村留美, 浅井剛, 福元喜啓		
講義概要	人々の生涯にわたる健康づくりとその維持に貢献するためには、保健・医療・福祉の分野に関する知識を身につけるだけではなく、自ら積極的に疑問を持ち探求する姿勢とその実践が必須である。本科目では、研究を実践するにあたって必要な事項、すなわち研究疑問の設定、研究の立案・実施、結果の解釈における注意点などを学ぶとともに、生涯健康科学領域での研究の最先端を知ること、保健・医療・福祉の分野に携わる人材に必要な研究スキルを身につけることを目指す。				
到達目標	1. 自身の研究に関する論文を読み、適切な解釈ができる 2. 健康に関するエビデンスや最新知見を理解し、自身の研究に反映することができる 3.、研究計画を作成することができる				
講義方法	講義はパワーポイントのスライド提示を中心に行う。				
アクティブラーニングの有無			あり		
備考					
成績評価 方法	評価基準・その他				
	課題（レポート）にて評価する（100％）				
テキスト	指定しない				
参考書	質的研究入門（ウヴェ・フリック、春秋社）、質的研究と量的研究のエビデンスの統合（キャサリン・ポーブ、医学書院）				
事前事後 学習	事前：各回のテーマにおける担当教員指定の課題について少なくとも1時間以上の予習を行う。 事後：各回の文献検索を1本以上行う。				
オフィスアワー・連絡先			KMULASに記載されている科目責任者に事前にメールで問い合わせること。		
講義計画					
回数	学習内容			教員名	
第1回	研究における問題の発見と課題設定			浅井 剛	
第2回	研究環境の構築（フィールド、研究チーム、ハードウェア、ソフトウェア、メンター）			浅井 剛	
第3回	研究デザインとPECO①（サンプルサイズなど）			浅井 剛	
第4回	研究デザインとPECO②（バイアスなど）			浅井 剛	
第5回	観察研究の進め方			福元 喜啓	
第6回	介入研究の進め方			福元 喜啓	
第7回	質的研究の方法（現象学、グランデッドセオリー、伝記研究、事例研究等）			種村 留美	
第8回	質的研究と量的研究のエビデンス統合			種村 留美	

科目名	地域包括ケア特論	科目区分	専門基礎科目	開講年次	1年次
講義形式	講義	必/選	選択	開講学期	後期
開講 キャンパス	牧野キャンパス	担当教員 (カナ)	◎イヅ'エトメ, ミキミ, ワキダ マサリ		
単位	1	担当教員 (漢字)	◎池添冬芽, 三木恵美, 脇田正徳		
講義概要	高齢者や障がい者およびその家族が住み慣れた地域において自分らしい生活ができるよう、医療・介護・生活支援を包括的に提供するためには、様々な組織・機関や専門職種がそれぞれの役割を理解し、協働しながら多面的な視点で支援策を展開しなければならない。本科目では地域包括ケアシステムを推進する上で基盤となる知識や介入手法、関連制度、各専門職・機関の役割、専門職に求められる視点と専門職連携について学修する。				
到達目標	1.地域包括ケアシステムの概要について説明することができる 2.地域包括ケアシステムの関連制度について概説することができる 3.地域包括ケアシステムを推進していく上で必要な知識および介入手法について説明できる 4.地域において医療・介護・生活支援を包括的に提供するための各専門職・機関の役割および連携について理解し、説明することができる 5.地域包括ケアシステムにおけるリハビリテーション専門職の役割および具体的な実践法について多角的視点から考えることができる				
講義方法	講義はパワーポイントのスライド提示を中心に行う。				
アクティブラーニングの有無		無し			
備考					
成績評価 方法	評価基準・その他				
	レポートにて評価する（100％）				
テキスト	指定しない				
参考書	ビルドアップ地域理学療法, 隆島研吾・田中康之（編集）, 医歯薬出版株式会社, 2021.				
事前事後 学習	授業で指示した内容について事前事後学習を行うこと 各回ごとに予習、復習ともに1時間以上の学習が必要				
オフィスアワー・連絡先			KMULASに記載されている科目責任者に事前にメールで問い合わせること。		
講義計画					
回数	学習内容			教員名	
第1回	地域包括ケアシステムと専門職連携			池添 冬芽	
第2回	地域包括ケアに関わる制度			池添 冬芽	
第3回	地域包括ケアシステムにおける実践的取り組み（予防的介入、フィールド調査等）			池添 冬芽	
第4回	地域包括ケアにおける自治体の役割と取り組み			池添 冬芽、ゲストスピーカー（自治体）	
第5回	地域包括ケアにおける地域包括支援センターの役割と取り組み			池添 冬芽、ゲストスピーカー（地域包括支援センター）	
第6回	住民の自助・互助を高めるための取り組み （通いの場・住民ボランティア育成・リハ専門職同行訪問事業）			三木 恵美	
第7回	だれもが住みよい街づくりに向けた取り組み （地域診断・地域ケア会議・認知症カフェ）			三木 恵美	
第8回	介護予防への関わり方の実際			脇田 正徳	

科目名	リハビリテーション教育学特論	科目区分	専門基礎科目	開講年次	1年次
講義形式	講義	必/選	選択	開講学期	後期
開講 キャンパス	牧野キャンパス	担当教員 (カナ)	◎かた外北R, フワイブ`ヨシ, ミキミ		
単位	1	担当教員 (漢字)	◎加藤寿宏, 福井信佳, 三木恵美		
講義概要	本講義では、リハビリテーションの卒前教育や新人療法士の卒後教育、そしてこれらを指導するための指導者養成教育を担う者に求められる豊かな人間性と倫理観を身につけるために必要な教育学および教育実践について学修する。また、現場を管理するために必要となるマネジメント能力についても学修する。具体的には、教員・指導者・管理者に求められる資質・能力と職業倫理、教育方法の基礎となる理論や技能、コミュニケーションスキル、職場の教育システムなど、指導的立場に立つ人となるするために必要な知識と技能を学修する。				
到達目標	1. 教員・指導者に求められる資質と能力について説明できる 2. リハビリテーションにおける職業倫理について説明できる 3. 管理者としてのリーダーシップとマネジメントについて説明できる 4. リハビリテーション教育において生じやすいハラスメントとその防止策について説明できる 5. リハビリテーション教育における教育方法・教育評価について説明できる				
講義方法	講義はパワーポイントのスライド提示、グループディスカッションを中心に行う。				
アクティブラーニングの有無			あり		
備考					
成績評価 方法	評価基準・その他				
	基準：課題レポート、発表内容を総合して評価する				
テキスト	講義毎に必要な資料を提示する				
参考書	講義中に参考文献等を適宜紹介する				
事前事後 学習	講義で指示した内容について事前事後学習を行うこと 各回ごとに予習、復習合わせて1時間以上の学習が必要				
オフィスアワー・連絡先			KMULASに記載されている科目責任者に事前にメールで問い合わせること。		
講義計画					
回数	学習内容			教員名	
第1回	教員・指導者に求められる資質能力			加藤 寿宏	
第2回	管理者としてのリーダーシップとマネジメント			加藤 寿宏	
第3回	教育システム・人事労務・業務管理			加藤 寿宏	
第4回	職業倫理、ハラスメント			福井 信佳	
第5回	教育方法学1：コーチングとティーチング			三木 恵美	
第6回	教育方法学2：アクティブラーニング			加藤 寿宏	
第7回	教育方法学3：クリニカルリーズニング、PBL（問題解決型学習）、OSCE			三木 恵美	
第8回	教育評価：ルーブリック、ポートフォリオ			福井 信佳	

科目名	心理学特論	科目区分	専門基礎科目	開講年次	1年次
講義形式	講義	必/選	選択	開講学期	後期
開講 キャンパス	牧野キャンパス	担当教員 (カナ)	◎ヨシムラサフミ, ミキエミ, マツシカガエ, ミヤハシトモコ, ハシモトシゴ, スガワコウサカ, ヤマシタマドカ, ハヤシヨウタ		
単位	2	担当教員 (漢字)	◎吉村匡史, 三木恵美, 松島佳苗, 宮原智子, 橋本晋吾, 砂川耕作, 山下円香, 林良太		
講義概要	心理学は医療、保健、福祉、教育、産業など社会のさまざまな場面に牽連する、非常に重要な学問であることから、生涯健康科学を学ぶにあたっても習得することが必須の領域である。本特論では心理学の基礎となる事項（生理心理学、発達心理学、神経心理学、行動心理学など）、そして特に臨床で必要とされる心理学の基本的な理論と知識、すなわち面接や心理検査による心理学的評価、面接において必要な技法、種々の心理療法の技法と適応範囲を紹介する。				
到達目標	1. 心理学の基礎的な概念を説明することができる 2. 健康の維持と心理学との関連について説明することができる 3. さまざまな年代、場面と心理学との関連を説明することができるな				
講義方法	PowerPointのスライド提示を中心に行う				
アクティブラーニングの有無			なし		
備考					
成績評価 方法	評価基準・その他				
	レポートにより評価を行う				
テキスト	講義毎に必要な資料を提示する				
参考書	基礎から学べる 医療現場で役立つ心理学. 大川一郎, 他（編著）. ミネルヴァ書房, 2020. 医療系のための臨床心理学. 竹森元彦（編著）. 講談社, 2023.				
事前事後 学習	授業で指示した内容について事前事後学習を行うこと 各回ごとに予習、復習ともに1時間以上の学習が必要				
オフィスアワー・連絡先			KMULASに記載されている科目責任者に事前にメールで問い合わせること。		
講義計画					
回数	学習内容			教員名	
第1回	心理学とは			吉村 匡史	
第2回	基礎心理学（1）			吉村 匡史	
第3回	基礎心理学（2）			吉村 匡史	
第4回	臨床心理学とは			吉村 匡史	
第5回	臨床心理学的評価法			吉村 匡史	
第6回	臨床心理学的治療法			吉村 匡史	
第7回	健康と心理学			吉村 匡史	
第8回	乳幼児・児童の心理			松島 佳苗	
第9回	思春期・青年期の心理			吉村 匡史	
第10回	高齢者の心理			吉村 匡史、宮原 智子	
第11回	日常生活動作と心理学（1）			砂川 耕作	
第12回	日常生活動作と心理学（2）			橋本 晋吾	
第13回	脳器質性疾患と心理学			山下 円香	
第14回	悪性疾患と心理学			三木 恵美	
第15回	精神疾患と心理学			林 良太	

科目名	基盤解剖生理学	科目区分	専門基礎科目	開講年次	1年次
講義形式	講義	必/選	選択	開講学期	前期
開講 キャンパス	牧野キャンパス	担当教員 (カナ)	◎イダ ヒロカズ , マエザ 仁志		
単位	1	担当教員 (漢字)	◎飯田寛和, 前澤仁志		
講義概要	本講義では、人体の構造と機能を理解するための解剖学と生理学に関する基礎知識を包括的に学ぶ。人体をその働きから捉え、器官系を有機的に結びつけた構成とすることによって、修士課程の学生に必要な解剖学・生理学の基礎的知識を網羅する。解剖学では、四肢や顔面口腔領域における筋、骨の構造を、生理学では、神経の基本的構造とその機能（神経興奮伝導と筋収縮等）、感覚器（体性感覚、特殊感覚、疼痛等）、循環器系を主に取り上げる。講義では、疾患、障がい理解につながる解剖・生理学の知識にも触れ、健康に関する情報を読み解く基盤となる解剖・生理学の知識の習得を目指す。				
到達目標	1. 上肢・下肢・体幹の骨,靱帯,筋肉について理解する 2. 運動・感覚・情動等をささえる神経系の構造と機能を理解する 3. 循環・呼吸・運動を司るそれぞれの器官の正常な機能を理解する				
講義方法	講義資料・PowerPointのスライド提示を中心に行う。ディスカッションも交える。				
アクティブラーニングの有無			あり：反転授業（課題を事前に学習し、授業時に発表する）		
備考					
成績評価 方法	評価基準・その他				
	ミニテスト、課題レポートによって総合的に評価する。				
テキスト	参考書に基づき講師が独自に作成した講義資料を、毎回、KMULAS上にアップロードする				
参考書	解剖学（標準理学療法学・作業療法学）、生理学（標準理学療法学・作業療法学）				
事前事後 学習	KMULAS上から講義資料をダウンロードし、1時間以上の予習をしていることを前提に授業を行う。KMULAS 上にある復習問題を行うことにより、知識の定着を図る。				
オフィスアワー・連絡先			KMULASに記載されている科目責任者に事前にメールで問い合わせること。		
講義計画					
回数	学習内容			教員名	
第1回	人体の基本構造：人体を構成する個々の器官と組織			前澤 仁志	
第2回	運動器：骨、筋、関節の構造と機能			飯田 寛和	
第3回	運動器系：体幹と四肢を構成する主な筋			飯田 寛和	
第4回	運動器系：顎顔面口腔を構成する主な骨と筋			前澤 仁志	
第5回	神経組織の基本構造と機能			前澤 仁志	
第6回	中枢神経系と末梢神経系			前澤 仁志	
第7回	感覚器：感覚器の機能と構造、体性感覚、疼痛、特殊感覚			前澤 仁志	
第8回	循環器：心臓の構造、血液の循環、血圧の調整			前澤 仁志	

科目名	データアナリティクス特論	科目区分	専門基礎科目	開講年次	1年次
講義形式	講義	必/選	必修	開講学期	前期
開講 キャンパス	牧野キャンパス	担当教員 (カナ)	◎/ムヲタケ, マヱガワヒトシ, タカシヲトシ, フクシマタケ, ヲサヒロキ		
単位	2	担当教員 (漢字)	◎野村卓生, 前澤仁志, 田頭悟志, 福島卓矢, 笹井浩行 (東京都健康長寿医療センター研究所)		
講義概要	本授業では、ヒトから得られる生体情報の中でも非侵襲的生理情報に注目し、それらの計測方法を学ぶとともに、情報を解析し、結果を解釈するための一連の過程を教授する。得られる情報の性質、ならびに情報を扱う上で必要不可欠な技法についても学び、収集する情報を適切に利活用する知識について理解する。また、統計学の基礎を学ぶとともに、生体情報を変数化し、解析を行うための手法の実際について、統計ソフトを用いて学習する。				
到達目標	1. 非侵襲的生理情報の取得方法および解析方法の概要を説明できる 2. 脳活動、筋活動、循環活動、呼吸活動、代謝活動の評価を模倣し、結果を解釈できる 3. 生理情報を変数化し、分析のための適切な統計方法を選択できる 4. 統計ソフトを使用して、単変量および多変量解析ができる				
講義方法	講義はPowerPointのスライド提示を中心に行う。計測の実習、パソコンを用いて統計ソフトを使用した解析を行う。				
アクティブラーニングの有無			あり		
備考					
成績評価 方法	評価基準・その他				
	レポート：100%（第5・10・15回の授業でレポート課題を提示し、総合的に判定する）				
テキスト	講師作成資料を配布する。				
参考書	1. 山田一郎. スマートヘルスケア: 生体情報の計測・評価・活用とウェアラブルデバイスの開発・製品事例. エヌ・ティー・エス, 2023 2. 中村好一. 基礎から学ぶ楽しい疫学 第4版. 医学書院, 2020 3. 神田善伸. EZRでやさしく学ぶ統計学 改訂3版 EBMの実践から臨床研究まで. 中外医学社, 2020 4. 金城俊哉. R統計解析パーフェクトマスター. 秀和システム, 2022				
事前事後 学習	各回ごとに予習、復習あわせて2時間以上の学習が必要。				
オフィスアワー・連絡先			KMULASに記載されている科目責任者に事前にメールで問い合わせること。		
講義計画					
回数	学習内容			教員名	
第1回	ヒトから得られる非侵襲的生理情報の取得方法とその解析			前澤 仁志	
第2回	脳活動の評価と結果の解釈			前澤 仁志	
第3回	筋活動の評価と結果の解釈			前澤 仁志	
第4回	口腔機能の評価と結果の解釈			前澤 仁志	
第5回	循環活動の評価と結果の解釈			前澤 仁志、田頭 悟志	
第6回	呼吸・代謝活動の評価と解釈			野村 卓生	
第7回	運動、生活活動、不活動の評価と解釈			野村 卓生	
第8回	生物統計学の基本			野村 卓生	
第9回	保健・医療・福祉分野の研究で使用される統計手法①			野村 卓生	
第10回	保健・医療・福祉分野の研究で使用される統計手法②			野村 卓生、福島 卓矢	
第11回	単変量および多変量解析の実際①			笹井 浩行	
第12回	単変量および多変量解析の実際②			笹井 浩行	
第13回	単変量および多変量解析の実際③			笹井 浩行	
第14回	単変量および多変量解析の実際④			笹井 浩行	
第15回	単変量および多変量解析の実際⑤			笹井 浩行	

科目名	生涯発達学特論	科目区分	専門基礎科目	開講年次	1年次
講義形式	講義	必/選	選択	開講学期	後期
開講 キャンパス	牧野キャンパス	担当教員 (カナ)	◎カトウシロ, タネムラミ, サトウハルヒコ, マツシマカエ, ミヤハラトモ		
単位	2	担当教員 (漢字)	◎加藤寿宏, 種村留美, 佐藤春彦, 松島佳苗, 宮原智子		
講義概要	人の発達とは、受精から死ぬまでの生涯にわたる時間の経過に伴って個体にある程度継続して起こる変化をさす。本講義では胎児期から高齢期までの時期に起きる個体の変化について運動機能と認知機能の2つに焦点をあて解説する。また、2つの機能は相互に関連しながら発達するため、運動機能と認知機能との関連や生活機能（身辺処理、遊び、仕事等）との関連も含め学ぶ。さらに、運動発達、認知発達の障害とリハビリテーション・教育・心理の臨床場面で使用する発達検査について演習を通し学ぶ。（				
到達目標	1. 人が生涯にわたって発達することについて具体的な例を挙げながら説明できる 2. 乳児期から学齢期の運動発達について説明できる 3. 乳児期から学齢期の認知発達について説明できる。また、運動機能と認知機能の発達との関連や生活機能との関連についても説明できる 4. 加齢に伴う運動機能、認知機能の変化について説明できる。 5. 運動発達、認知発達の障害について説明できる。 6. 臨床で使用する各発達検査の適応と特徴について説明できる。				
講義方法	講義はパワーポイントのスライド提示を中心に行う。				
アクティブラーニングの有無			あり		
備考					
成績評価 方法	評価基準・その他				
	課題レポート、発表内容を総合して評価する				
テキスト	講義毎に必要な資料を提示する				
参考書	岩崎清隆「人間発達学 第2版」医学書院				
事前事後 学習	講義で指示した内容について事前事後学習を行うこと 各回ごとに予習、復習合わせて1時間以上の学習が必要				
オフィスアワー・連絡先			KMULASに記載されている科目責任者に事前にメールで問い合わせること。		
講義計画					
回数	学習内容			教員名	
第1回	生涯発達とは			加藤 寿宏	
第2回	発達の理論			加藤 寿宏	
第3回	胎児期の発達			佐藤 春彦	
第4回	乳児期の運動発達 1			佐藤 春彦	
第5回	乳児期の運動発達 2			佐藤 春彦	
第6回	乳児期の認知発達・情動発達			松島 佳苗	
第7回	幼児期・学齢期の運動発達			佐藤 春彦	
第8回	幼児期・学齢期の認知発達 1			松島 佳苗	
第9回	幼児期・学齢期の認知発達 2			松島 佳苗	
第10回	加齢と運動機能			佐藤 春彦	
第11回	加齢と認知機能			種村 留美、宮原 智子	
第12回	運動発達の評価			佐藤 春彦	
第13回	運動発達の障害			佐藤 春彦	
第14回	認知発達の評価			加藤 寿宏	
第15回	認知発達の障害			加藤 寿宏	

科目名	リサーチ・プレゼンテーション&アカデミック・ライティング	科目区分	専門基礎科目	開講年次	1年次
講義形式	講義	必/選	必修	開講学期	後期
開講 キャンパス	牧野キャンパス	担当教員 (カナ)	◎伊ハシ/リアキ		
単位	1	担当教員 (漢字)	◎市橋則明		
講義概要	本授業では、リサーチ・プレゼンテーションおよびアカデミック・ライティングの基本的な理解と応用の方法を学習する。リサーチ・プレゼンテーションでは、聞き手に合わせて、自らの研究成果を理解してもらうことのできる資料作成方法やソフトウェアの利用方法等について学び、学会発表を想定しての実践を行う。また、アカデミック・ライティングでは、筆者が自分の思考について論点を整理して、科学的根拠をもとに学術的文章として表現できるように演習を通して学び、科学雑誌への投稿を想定しての実践を行う。				
到達目標	1. 他者に理解されるようなプレゼンテーション手法を理解し、それを実践するためのソフトウェアの使用方法を説明できる 2. 科学論文の構造について理解し、論文に不可欠な情報を説明できる 3. 論点を整理する方法と、論拠に基づく主張の仕方について理解し、それらを説明できる 4. 例示されたプレゼンテーションや論文の原稿の問題点を指摘し、それらを改善できる				
講義方法	講義はパワーポイントのスライド提示を中心に行う。				
アクティブラーニングの有無			あり		
備考					
成績評価 方法	評価基準・その他				
	講義中の小テスト・発表等により評価する。				
テキスト	指定しない				
参考書	高橋 佑磨「伝わるデザインの基本 増補改訂3版」技術評論社 康永 秀生「必ずアクセプトされる医学英語論文 改訂版」金原出版 Hilary Glasman-deal「Science Research Writing for Non-Native Speakers of English」 ICP				
事前事後 学習					
オフィスアワー・連絡先			KMULASに記載されている科目責任者に事前にメールで問い合わせること。		
講義計画					
回数	学習内容			教員名	
第1回	リサーチ・プレゼンテーションの概要、パワーポイント等の使用方法			市橋 則明	
第2回	プレゼンテーション書類の作成法			市橋 則明	
第3回	アカデミック・ライティングの概要（論文執筆のポイント）			市橋 則明	
第4回	論文投稿から採択されるまでのポイント			市橋 則明	
第5回	リサーチプレゼンテーションの実践1：例題について問題点を指摘し、修正案を議論する（背景と方法）			市橋 則明	
第6回	リサーチプレゼンテーションの実践2：例題について問題点を指摘し、修正案を議論する（結果と考察）☒			市橋 則明	
第7回	アカデミック・ライティングの実践1：例題について問題点を指摘し、修正案を議論する（背景と方法）			市橋 則明	
第8回	アカデミック・ライティングの実践2：例題について問題点を指摘し、修正案を議論する（結果と考察）☒			市橋 則明	

科目名	高度医療技術演習Ⅰ	科目区分	専門基礎科目	開講年次	1年次
講義形式	演習	必/選	選択	開講学期	後期
開講 キャンパス	牧野キャンパス	担当教員 (カナ)	◎カバジ 昉, マヰダ ワビシ, マツマカエ, ホウライコウジ, ハシモトシンゴ, ワキダ マサリ, モリキミヒコ, スカガ ワコウサカ, フクシマタケ, チュウジ ヨウユタ		
単位	2	担当教員 (漢字)	◎中野治郎, 前澤仁志, 松島佳苗, 蓬萊谷耕士, 橋本晋吾, 脇田正徳, 森公彦, 砂川耕作, 福島卓矢, 中條雄太		
講義概要	本演習では、実際に本大学関連医療施設において、指導者のもとで高度医療技術の提供を経験する。高度医療技術とは、最先端の治療器および解析機器を駆使し、最適なりハビリテーションアプローチを的確に実施することを指す。最先端の治療器としては、ロボット下肢装具を用いた治療、MR（Mixed Reality）を用いた治療器、新型物理療法機器等が含まれ、これらによる効果を床反力計測システム、表面筋電図、重心動揺計、身体組成計等を用いて検証する。加えて、機器の使用に限らず、評価結果から病態と原因について仮説をたて、リハビリテーションアプローチを行い、効果検証を行うという臨床推論の手続きを熟練することも本演習のねらいに含まれる。なお、本演習を受講できるのは理学療法士または作業療法士の資格を有するものに限る。				
到達目標	1.各疾患患者に対する最先端の治療器を用いたアプローチ方法を身につける。 2.最先端の解析機器を用いて効果検証を行い、臨床推論の手続きを熟練する。 3.最先端の治療器および解析機器の原理と適応およびリスクを理解する。				
講義方法	講義はパワーポイントのスライド提示を中心に行う。演習は指導者のもとで患者を対象に行う。				
アクティブラーニングの有無			あり		
備考					
成績評価 方法	評価基準・その他				
	機器操作の熟練度（50％），課題レポート（50％）				
テキスト	指定しない。				
参考書	1.臨床で使える半側空間無視への実践的アプローチ,前田眞治(監),医学書院,2022 2.臨床神経生理学,柳澤信夫(著),医学書院,2008 3.臨床にいかす表面筋電図 [Web動画付] セラピストのための動作分析手法,加藤 浩・他(監修),医学書院,2020 4.エビデンスから身につける物理療法 第2版,庄本 康治(編),羊土社,2023				
事前事後 学習	使用する治療器および評価機器の原理と注意点について学習しておくこと。				
オフィスアワー・連絡先			オフィスアワー：後日提示する。連絡先：nakanoj@hirakata.kmu.ac.jp		
講義計画					
回数	学習内容			教員名（所属・講座）	
第1回	ロボット下肢装具を用いた脳卒中リハビリテーション①			森 公彦,脇田 正徳,中條 雄太	
第2回	ロボット下肢装具を用いた脳卒中リハビリテーション②			森 公彦,脇田 正徳,中條 雄太	
第3回	重心動揺計と床反力計測システム用いた評価方法			森 公彦,脇田 正徳,中條 雄太	
第4回	MR（Mixed Reality）を用いたリハビリテーション			橋本 晋吾	
第5回	アイトラッカーを用いたリハビリテーション			砂川 耕作	
第6回	表面筋電図を用いた評価方法			前澤 仁志、蓬萊谷 耕士	
第7回	舌圧計，呼吸筋力計，体組成計を用いた評価方法			福島 卓矢	
第8回	運動関連脳電位と脳波のリハビリテーション応用			前澤 仁志	
第9回	先端解析機器を用いた小児動作分析			松島 佳苗	
第10回	新型物理療法機器を用いたリハビリテーション			中野 治郎	
第11回	患者を対象とした実践演習			中野 治郎、前澤 仁志、脇田 正徳、森 公彦、福島 卓矢、中條 雄太、松島 佳苗、蓬萊谷 耕士、橋本 晋吾、砂川 耕作	
第12回	患者を対象とした実践演習			中野 治郎、前澤 仁志、脇田 正徳、森 公彦、福島 卓矢、中條 雄太、松島 佳苗、蓬萊谷 耕士、橋本 晋吾、砂川 耕作	
第13回	患者を対象とした実践演習			中野 治郎,前澤 仁志,脇田 正徳,森 公彦,福島 卓矢,中條 雄太,松島 佳苗,蓬萊谷 耕士,橋本 晋吾,砂川 耕作	
第14回	患者を対象とした実践演習			中野 治郎、前澤 仁志、脇田 正徳、森 公彦、福島 卓矢、中條 雄太、松島 佳苗、蓬萊谷 耕士、橋本 晋吾、砂川 耕作	
第15回	患者を対象とした実践演習			中野 治郎,前澤 仁志,脇田 正徳,森 公彦,福島 卓矢,中條 雄太,松島 佳苗,蓬萊谷 耕士,橋本 晋吾,砂川 耕作	

科目名	高度医療技術演習Ⅱ	科目区分	専門基礎科目	開講年次	1年次
講義形式	演習	必/選	選択	開講学期	後期
開講 キャンパス	牧野キャンパス	担当教員 (カナ)	◎ヨシムラサヲミ、フカイノブ ヨシ、フクモトヨシロ、ナカヤマジ ユン、ヤマシタマツ カ、ヤマカ タモコ、ウメハラジ ユン、ナカサヤカ		
単位	2	担当教員 (漢字)	◎吉村匡史，福井信佳，福元喜啓，中山淳，山下円香，山縣桃子，梅原潤，中尾彩佳		
講義概要	本演習では，生涯において健康な生活の遂行ができなくなった高齢者および患者モデルを想定し，最先端の治療器および解析機器を駆使した評価・アプローチをシミュレーションする．治療器としては，生活障害に対するアシスティブテクノロジーを用いた治療や筋機能低下に対するバイオデックスシステム，解析・評価機器としては三次元動作分析装置，表面筋電図，超音波画像装置，生体電気インピーダンス計，脳波計等が含まれる．機器の使用に限らず，仮説生成から評価，効果検証を行うという一連の臨床推論の手続きを熟練することも本演習のねらいに含まれる．				
到達目標	1. 高齢者および患者モデルを想定した、最先端の治療器および解析機器による評価やアプローチ方法を身につける。 2. 仮説生成から評価、効果検証を行うという一連の臨床推論の手続きを身につける。 3. 脳波を用いた脳機能評価の手法と結果の解釈を身につける。 4. Assistive technologyを用いた評価・治療・効果検証の方法を身につける。				
講義方法					
アクティブラーニングの有無			あり		
備考					
成績評価 方法	評価基準・その他				
	実技テスト（30%）、課題レポート（70%）				
テキスト	指定しない				
参考書	デジタル脳波の記録・判読の手引き，日本臨床神経生理学会（編集），診断と治療社，2015.				
事前事後 学習	使用する機器および評価機器の原理と注意点について学習しておくこと。				
オフィスアワー・連絡先			KMULASに記載されている科目責任者に事前にメールで問い合わせること。		
講義計画					
回数	学習内容			教員名	
第1回	概論とオリエンテーション			吉村 匡史	
第2回	超音波画像装置と生体電気インピーダンス装置：筋機能・筋特性評価について学ぶ			福元 喜啓	
第3回	超音波画像装置と生体電気インピーダンス装置：筋機能・筋特性評価について学ぶ			福元 喜啓	
第4回	バイオデックス：様々な種類の筋力評価とトレーニング方法を学ぶ			中尾 彩佳	
第5回	バイオデックス：様々な種類の筋力評価とトレーニング方法を学ぶ			中尾 彩佳	
第6回	三次元動作解析装置と床反力計：健常者の動作分析・データ解釈を通して異常な動作について学ぶ			山縣 桃子	
第7回	三次元動作解析装置と床反力計：健常者の動作分析・データ解釈を通して異常な動作について学ぶ			山縣 桃子	
第8回	表面筋電図：歩行や走行における筋活動の分析・解析を行い、運動負荷量の変化に伴う筋活動の変化について学ぶ			梅原 潤	
第9回	表面筋電図：歩行や走行における筋活動の分析・解析を行い、運動負荷量の変化に伴う筋活動の変化について学ぶ			梅原 潤	
第10回	脳波：秒単位で変化する脳機能を神経生理学的手法にて評価する			吉村 匡史、山下 円香	
第11回	脳波：秒単位で変化する脳機能を神経生理学的手法にて評価する			吉村 匡史、山下 円香	
第12回	脳波：秒単位で変化する脳機能を神経生理学的手法にて評価する			吉村 匡史、山下 円香	
第13回	脳波：秒単位で変化する脳機能を神経生理学的手法にて評価する			吉村 匡史、山下 円香	
第14回	Assistive technologyを用いた治療道具の設計、製作、効果検証について学ぶ			福井 信佳、中山 淳	
第15回	Assistive technologyを用いた治療道具の設計、製作、効果検証について学ぶ			福井 信佳、中山 淳	

科目名	生体機能解析学特論	科目区分	専門科目	開講年次	1年次
講義形式	講義	必/選	選択	開講学期	前期
開講キャンパス	牧野キャンパス	担当教員（カナ）	◎カバダ`ロウ,イダ`ヒロカズ` ,仔ハシノリアキ,サトウハルヒコ,マエザ`ワヒトシ		
単位	2	担当教員（漢字）	◎中野治郎, 飯田寛和, 市橋則明, 佐藤春彦, 前澤仁志		
講義概要	本講義では、生涯において健康な生活の遂行を損ねる可能性がある生体機能の変化を理解するために、ヒトの関節運動機能、感覚機能、脳機能についての知識を深め、また先天性を含む疾病、外傷、加齢によって生じる運動障害の病態と、その解析方法を学ぶ、特に骨格筋および関節の機能は移動能力に直結し、健康な生活に不可欠となるため本講義で大きく取り上げ、検査の方法、検査結果の解釈の仕方を学び、運動学的、生理学的、解剖学的な観点から病態解析ができるように高度な知識を身につける。				
到達目標	1.関節運動機能、感覚機能、脳機能の障害により生じる運動障害の病態を理解する。 2.先端医療機器を用いた関節運動機能、感覚機能、脳機能の解析方法を理解する。 3.歩行障害に対する病態解析を行い、それに対する適切な治療プログラムを導くための知識を身につける				
講義方法	講義はパワーポイントのスライド提示を中心に行う。演習は指導者のもとで患者を対象に行う。				
アクティブラーニングの有無			あり		
備考					
成績評価方法	評価基準・その他				
	授業内課題（小テスト・レポート）にて評価する（100%）				
テキスト	指定しない。				
参考書	1.臨床歩行計測入門,臨床歩行分析研究会(監修),医歯薬出版,2008 2.機能障害科学入門,千住英明(監修),神陵文庫出版部,2010 3.筋機能改善の理学療法とそのメカニズム ―理学療法の科学的基礎を求めて― 第3版,望月 久 (編集),ナッブ,2014 4.臨床神経生理学,柳澤信夫(著),医学書院,2008				
事前事後学習	使用する治療器および評価機器の原理と注意点について学習しておく。				
オフィスアワー・連絡先			オフィスアワー：後日提示する。連絡先：nakanoj@hirakata.kmu.ac.jp		
講義計画					
回数	学習内容			教員名（所属・講座）	
第1回	筋の運動学とバイオメカニクス			市橋 則明	
第2回	筋機能の評価			市橋 則明	
第3回	骨格筋の病態に対する治療法：ストレッチングのエビデンス			市橋 則明	
第4回	骨格筋の病態に対する治療法：筋力トレーニングのエビデンス			市橋 則明	
第5回	関節の解剖と評価			飯田 寛和	
第6回	関節の病態に対する治療法：人工関節置換術			飯田 寛和	
第7回	歩行分析概説：三次元運動計測と評価変数			佐藤 春彦	
第8回	加齢による運動機能変化の定量的分析			佐藤 春彦	
第9回	定型発達児および障害児の運動機能の定量的分析			佐藤 春彦	
第10回	筋電図（表面筋電図、誘発筋電図）を用いた神経・筋機能評価			前澤 仁志	
第11回	経頭蓋電気刺激を用いた脳機能の介入操作			前澤 仁志	
第12回	口腔機能（嚥下機能を含む）の評価方法			前澤 仁志	
第13回	骨格筋と関節の病態に対する組織学的・生化学的解析			中野 治郎	
第14回	痛みの病態と解析方法			中野 治郎	
第15回	物理学的刺激に対する生体反応と治療への応用			中野 治郎	

科目名	健康支援開発学特論	科目区分	専門科目	開講年次	1年次
講義形式	講義	必/選	選択	開講学期	前期
開講 キャンパス	牧野キャンパス	担当教員 (カナ)	◎伊ヱ イトメ、ムラタオ、アサツヨシ、フクモトヒロ		
単位	2	担当教員 (漢字)	◎池添冬芽, 野村卓生, 浅井剛, 福元喜啓		
講義概要	本特論では、ヒトの健康を心身機能や生活機能、行動学的・社会的側面から包括的に理解し、健康上の問題を解決するための評価・支援法と、その理論的構築のための能力を開発することを目的に教授する。健康関連課題を包括的に捉え、より健康的に生活していく支援を考えるための科学的基盤となる理論や最新知見について理解を深め、具体的な健康支援策の展開について学際的な視点から探求し、系統的に実践する能力の開発を目指す。				
到達目標	1. ヒトの健康支援に必要なとなる理論や健康関連課題について多面的な視点から説明することができる。 2. 健康支援に関するエビデンスや最新知見、ガイドラインについて理解することができる。 3. 健康維持・向上や生活の質向上のための具体的な評価法や予防的介入法について説明することができる。 4. 健康寿命延伸にむけた戦略について学際的視点で考えることができる。				
講義方法	講義はパワーポイントのスライド提示を中心に行う。				
アクティブラーニングの有無			なし		
備考					
成績評価方法	評価基準・その他				
	授業内課題（小テスト・レポート）にて評価する（100%）				
テキスト	指定しない				
参考書	1. 今村 裕行、沖嶋 今日太、他『健康増進科学概論 運動・栄養・休養』東京数学社2021 2. 森 晃爾『産業保健マニュアル 改訂第8版』南山堂2021				
事前事後学習	各回ごとに予習、復習あわせて4時間以上の学習が必要				
オフィスアワー・連絡先			KMULASに記載されている科目責任者に事前にメールで問い合わせること。		
講義計画					
回数	学習内容			教員名	
第1回	高齢者の健康支援に関するエビデンス			池添 冬芽	
第2回	筋特性・運動機能の加齢変化と運動器の機能低下予防の実際			池添 冬芽	
第3回	地域理学療法ガイドライン			池添 冬芽	
第4回	日本人の生活習慣とその課題			野村 卓生	
第5回	生活習慣病の実態とその対策			野村 卓生	
第6回	働く人の健康問題とその対策			野村 卓生	
第7回	健康支援における適切な心身評価法の考え方			浅井 剛	
第8回	健康支援における先進的技術の適用			浅井 剛	
第9回	介護予防事業におけるセラピストの実践的関わり方について			浅井 剛	
第10回	BMIと体組成の考え方			福元 喜啓	
第11回	筋量・筋質の概念と評価方法			福元 喜啓	
第12回	筋量・筋質のための治療戦略			福元 喜啓	
第13回	内部障害患者の健康問題と関連ガイドライン			野村 卓生	
第14回	内部障害患者の健康支援に関するエビデンス			野村 卓生	
第15回	内部障害患者のフレイルの実態とその対策			野村 卓生	

科目名	こどもとおとなの神経科学特論	科目区分	専門科目	開講年次	1年次
講義形式	講義	必/選	選択	開講学期	前期
開講 キャンパス	牧野キャンパス	担当教員 (カナ)	◎ヨシマサフミ, タネムルミ, ミキミ		
単位	2	担当教員 (漢字)	◎吉村匡史, 種村留美, 三木恵美		
講義概要	人々が生涯にわたってその人らしく過ごすためには、心身ともに健やかな状態を保つことが望まれる。神経科学とは、脳および全身の神経系の機能や発達に関する研究分野であり、近年その発展には目覚ましいものがある。本特論では脳やこころの機能と発達・その障害に関して、科学的な視点を通してこどもからおとなまで幅広い年齢層にわたる基礎知識と最新の知見、自ら疑問をもち探求するための素養を身につけることを目指し、神経心理学等新しい評価技法や介入研究、認知面の問題を補うAssistive technologyの開発研究や支援技法などを用いた研究方法も含めて教授する。				
到達目標	こどもとおとなの神経科学研究の基礎的学問および各種研究方法論を理解し、自らの研究疑問の設定、研究計画立案、実験及びデータ収集の実施と分析の一連の研究の過程を組み立てることができる				
講義方法	講義とアクティブラーニングを行う				
アクティブラーニングの有無			あり		
備考					
成績評価 方法	評価基準・その他				
	基準：研究への取り組み、課題レポート、発表内容を総合して評価する				
テキスト	使用しない				
参考書	15レクチャーシリーズ 作業療法テキスト 高次脳機能障害・演習（石川朗、種村留美編 中山書店） Neuropsychological rehabilitation(Barbala Wilson,Cambridge University Press) カンデル 認知脳科学 嶋田総太郎, コロナ社, 2017. 精神医学 第4版増補版, 上野武治（編集）, 医学書院, 2021.				
事前事後学習	自らの研究テーマに関する先行研究を読んでください。各回の授業にあわせて事前学修・事後学修を行ってください。				
オフィスアワー・連絡先			KMULASに記載されている科目責任者に事前にメールで問い合わせること。		
講義計画					
回数	学習内容			教員名	
第1回	脳の仕組みの神経科学			吉村 匡史	
第2回	心の仕組みの神経科学			吉村 匡史	
第3回	意識の神経科学			吉村 匡史	
第4回	情動の神経科学			吉村 匡史	
第5回	精神疾患と認知機能			吉村 匡史	
第6回	神経科学に関する文献検索の方法			三木 恵美	
第7回	高次脳機能障害の神経科学			種村 留美	
第8回	高次脳機能障害の神経科学			種村 留美	
第9回	高次脳機能障害の神経科学（注意・記憶）			種村 留美	
第10回	高次脳機能障害の神経科学（遂行機能・社会行動障害）			種村 留美	
第11回	Assistive technologyから見た高次脳機能障害			種村 留美	
第12回	おとなのがんと神経心理学			三木 恵美	
第13回	こども・AYA世代のがんと神経心理学			三木 恵美	
第14回	地域でくらす高齢者の神経心理学			三木 恵美	
第15回	神経科学に関する文献の発表			種村 留美,吉村 匡史,三木 恵美	

科目名	こどもとおとなの生活科学特論	科目区分	専門科目	開講年次	1年次
講義形式	講義	必/選	選択	開講学期	前期
開講 キャンパス	牧野キャンパス	担当教員 (カナ)	◎フクイシノブ、カトウシロ、マツシマカサエ、ナカヤマジュン		
単位	2	担当教員 (漢字)	◎福井信佳，加藤寿宏，松島佳苗，中山淳		
講義概要	病気や障害などで生活に困難がある人の生活支援は、身体機能や認知機能などが日常生活活動（ADL）や生活関連活動（IADL）に影響を与える要因を科学的にとらえ、問題解決能力を高めていく必要がある。また、障害そのものを治すという視点ではなく、障害がありながらも生活を行うという視点から福祉機器、義肢・装具などを活用することも重要となる。さらに、家族を含む包括的支援に加え、地域社会全体で育てる・支えるという視点から、教育機関、行政機関、地域社会と協働していく必要がある。本特論では、疾患、障害に伴うさまざまな生活障害に関し、科学的な視点を通してこどもからおとなまで幅広い年齢層にわたる基礎知識と最新の知見、自ら疑問をもち探求するための素養を身につけることを目指し、疾患・障害と生活障害との関連を教授する。また、家族・地域支援、福祉機器、義肢・装具などを用いた支援技法などを研究方法も含め教授する。				
到達目標	1. 身体・認知の障害と生活障害との関連について説明することができる。 2. 発達過程の障害と生活障害について説明することができる。 3. 福祉機器、義肢・装具の種類と適用について説明することができる。 4. 地域で暮らす障害がある神経発達症児を主とした子どもの家族、学校支援について説明することができる				
講義方法	講義とアクティブラーニングを行う				
アクティブラーニングの有無			あり		
備考					
成績評価 方法	評価基準・その他				
	各授業における発表内容および授業内課題（レポート・レジュメ）にて評価する				
テキスト	使用しない				
参考書	文献等を適宜指示する				
事前事後 学習	各回の授業にあわせて事前・事後学習を行うこと。				
オフィスアワー・連絡先			KMULASに記載されている科目責任者に事前にメールで問い合わせること。		
講義計画					
回数	学習内容			教員名	
第1回	障害があるひとの生活科学（講義）			加藤 寿宏	
第2回	発達過程の障害と生活（講義）			加藤 寿宏	
第3回	身体・認知の障害と生活（講義）			福井 信佳	
第4回	切断と義肢・福祉用具（講義）			福井 信佳	
第5回	からだの動きと義手の操作（講義）			福井 信佳	
第6回	上肢切断とリハビリテーション（講義）			福井 信佳	
第7回	装具学総論（講義）			中山 淳	
第8回	装具の適合（講義）			中山 淳	
第9回	上肢装具とリハビリテーション（講義）			中山 淳	
第10回	親子の関わりと子育て（講義）			松島 佳苗	
第11回	社会生活とコミュニケーションの障害（講義）			松島 佳苗	
第12回	感覚の問題と生活障害（講義）			松島 佳苗	
第13回	不器用と生活障害（講義）			加藤 寿宏	
第14回	地域における学校生活とその障害（講義）			加藤 寿宏	
第15回	長期入院（院内学級）における学校生活とその障害（講義）			松島 佳苗	

科目名	生体機能解析学演習	科目区分	専門科目	開講年次	2年次
講義形式	演習	必/選	選択	開講学期	前期
開講キャンパス	牧野キャンパス	担当教員（カナ）	◎カバジ`ロウ,イダ`ヒロカズ`,イチハシノリアキ,サトウハルヒコ,マエザ`ワヒトシ		
単位	2	担当教員（漢字）	◎中野治郎, 飯田寛和, 市橋則明, 佐藤春彦, 前澤仁志		
講義概要	本演習では、生体機能解析学特論で紹介された非侵襲的検査方法による測定結果の解釈と統計学的処理について先行研究の読解を含めた演習方式で学習する。 超音波エコー、三次元動作解析、重心動揺計、脳波、慣性計測装置（IMU）、表面筋電図、口腔機能検査、新体組成計、モデル動物を用いた基礎実験それぞれの評価・測定方法の利点と欠点、統計学的処理方法ならびに解釈の仕方を理解した上で、自らが研究テーマに相応しい測定法を選択し、生体の運動機能・生理機能を解析する力の習得を目指す。さらに生体解析学に関わる先行研究の批判的吟味を繰り返し、主体的に活用する能力を習得するとともに、自身の研究課題の位置づけを明確化することを目標とする。				
到達目標	1.骨格筋の解析に関する論文の批判的吟味を行い、自身の研究テーマにつながる課題を探索できる 2.三次元動作解析装置、表面筋電図を用いた歩行分析に関する論文の批判的吟味を行い、自身の研究テーマにつながる課題を探索できる 3.脳機能検査、重心動揺計、口腔機能検査に関する論文の批判的吟味を行い、自身の研究テーマにつながる課題を探索できる 4.モデル動物を用いた論文の批判的吟味を行い、自身の研究テーマにつながる課題を探索できる				
講義方法	学生主体でPowerpointを用いた講義および論文の批判的吟味を行う。				
アクティブラーニングの有無			あり		
備考					
成績評価方法	評価基準・その他				
	各授業における発表内容および授業内課題（レポート・レジュメ）にて評価する（100％）				
テキスト	指定しない。				
参考書	1.臨床歩行計測入門,臨床歩行分析研究会(監修),医歯薬出版,2008 2.機能障害科学入門,千住英明(監修),神陵文庫出版部,2010 3.筋機能改善の理学療法とそのメカニズム ー理学療法の科学的基礎を求めてー 第3版,望月 久（編集）,ナッパ,2014 4.臨床神経生理学,柳澤信夫(著),医学書院,2008				
事前事後学習	使用する治療器および評価機器の原理について学習しておく。				
オフィスアワー・連絡先			オフィスアワー：後日提示する。連絡先：nakanoj@hirakata.kmu.ac.jp		
講義計画					
回数	学習内容			教員名（所属・講座）	
第1回	筋の運動学とバイオメカニクスに関する論文の批判的吟味および研究課題の探求			市橋 則明	
第2回	筋機能の評価に関する論文の批判的吟味および研究課題の探求			市橋 則明	
第3回	ストレッチングに関する論文の批判的吟味および研究課題の探求			市橋 則明	
第4回	筋力トレーニングに関する論文の批判的吟味および研究課題の探求			市橋 則明	
第5回	股関節運動学に関する論文の批判的吟味および研究課題の探求			飯田 寛和	
第6回	人工関節に関する論文の批判的吟味および研究課題の探求			飯田 寛和	
第7回	歩行の関節運動、筋活動、関節モーメント、筋パワーの分析に関する論文の批判的吟味 および研究課題の探求			佐藤 春彦	
第8回	重心動揺の時間、距離、周波数、非線形分析に関する論文の批判的吟味 および研究課題の探求			佐藤 春彦	
第9回	定型発達児および障害児の運動機能に関する論文の批判的吟味および研究課題の探求			佐藤 春彦	
第10回	脳波や脳磁図計測装置を用いた感覚・運動機能評価に関する論文の批判的吟味および 研究課題の探求			前澤 仁志	
第11回	脳波や脳磁図計測装置を用いた感覚・運動機能評価に関する論文の批判的吟味および 研究課題の探求			前澤 仁志	
第12回	口腔機能（嚥下機能を含む）の評価に関する論文の批判的吟味および研究課題の探求			前澤 仁志	
第13回	がん患者の運動機能と身体組成に関する論文の批判的吟味および研究課題の探求			中野 治郎	
第14回	急性痛・慢性痛モデル動物の行動学的解析に関する論文の批判的吟味および研究課題の探 求			中野 治郎	
第15回	廃用性筋萎縮モデル動物の組織学的・生化学的解析に関する論文の批判的吟味および 研究課題の探求			中野 治郎	

科目名	健康支援開発学演習	科目区分	専門科目	開講年次	2年次
講義形式	演習	必/選	選択	開講学期	前期
開講 キャンパス	牧野キャンパス	担当教員 (カナ)	◎イヅ イトメ, ムヲタカオ, アサヱヨシ, フクモトシロ		
単位	2	担当教員 (漢字)	◎池添冬芽, 野村卓生, 浅井剛, 福元喜啓,		
講義概要	本授業では、身体構造・機能から心理・社会的、行動学的領域まで、ヒトの健康に関わる評価・測定方法について演習形式で学習する。客観性・信頼性・簡便性・経済性等の面から、それぞれの評価・測定方法の利点と欠点を理解し、自らが研究対象とする領域、対象の属性に応じた評価・測定法を選択し、健康に関わる課題を科学的・体系的に解明し、支援法を探究・開発する力を身につけることを目指す。さらに健康支援に関わる先行研究の批判的吟味を繰り返し、主体的に活用する能力を習得するとともに、自身の研究課題の位置づけを明確化することを目標とする。				
到達目標	1. 高齢者の運動機能・生活機能向上に関する論文の批判的吟味を行い、自身の研究テーマにつながる課題を探究できる 2. 働く世代の健康問題とその対策に関する論文の批判的吟味を行い、自身の研究テーマにつながる課題を探究できる 3. 歩行動作に関する論文の批判的吟味を行い、自身の研究テーマにつながる課題を探究できる 4. 特性に関する論文の批判的吟味を行い、自身の研究テーマにつながる課題を探究できる 5. 内部障害患者の運動機能・生活機能向上に関する論文の批判的吟味を行い、自身の研究テーマにつながる課題を探究できる				
講義方法					
アクティブラーニングの有無			あり		
備考					
成績評価 方法	評価基準・その他				
	各授業における発表内容および授業内課題（レポート・レジュメ）にて評価する（100％）				
テキスト	指定しない				
参考書	1. 大崎 泉『図解PubMedの使い方: インターネットで医学文献を探す』日本医学図書館協会2022 2. 重見 大介、岩上 将夫、他『膨大な医学論文から最適な情報に最短でたどり着くテクニック』新興医学出版社2021				
事前事後 学習	各回ごとに予習、復習あわせて4時間以上の学習が必要				
オフィスアワー・連絡先			KMULASに記載されている科目責任者に事前にメールで問い合わせること。		
講義計画					
回数	学習内容			教員名	
第1回	高齢者の運動機能・生活機能向上に関する論文の批判的吟味および研究課題の探究			池添 冬芽	
第2回	高齢者の運動機能・生活機能向上に関する論文の批判的吟味および研究課題の探究			池添 冬芽	
第3回	高齢者の運動機能・生活機能向上に関する論文の批判的吟味および研究課題の探究			池添 冬芽	
第4回	働く世代の健康問題とその対策に関する論文の批判的吟味および研究課題の探究			野村 卓生	
第5回	働く世代の健康問題とその対策に関する論文の批判的吟味および研究課題の探究			野村 卓生	
第6回	働く世代の健康問題とその対策に関する論文の批判的吟味および研究課題の探究			野村 卓生	
第7回	歩行動作に関する論文の批判的吟味および研究課題の探究			浅井 剛	
第8回	歩行動作に関する論文の批判的吟味および研究課題の探究			浅井 剛	
第9回	歩行動作に関する論文の批判的吟味および研究課題の探究			浅井 剛	
第10回	筋特性に関する論文の批判的吟味および研究課題の探究			福元 喜啓	
第11回	筋特性に関する論文の批判的吟味および研究課題の探究			福元 喜啓	
第12回	筋特性に関する論文の批判的吟味および研究課題の探究			福元 喜啓	
第13回	内部障害患者の運動機能・生活機能向上に関する論文の批判的吟味および課題の探究			野村 卓生	
第14回	内部障害患者の運動機能・生活機能向上に関する論文の批判的吟味および課題の探究			野村 卓生	
第15回	内部障害患者の運動機能・生活機能向上に関する論文の批判的吟味および課題の探究			野村 卓生	

科目名	こどもとおとなの神経科学演習	科目区分	専門科目	開講年次	2 年次
講義形式	演習	必/選	選択	開講学期	前期
開講 キャンパス	牧野キャンパス	担当教員 (カナ)	◎ヨシムラサフミ、タネムツミ、ミキエ		
単位	2	担当教員 (漢字)	◎吉村匡史, 種村留美, 三木恵美		
講義概要	人々は生涯にわたって、年代を問わずさまざまな疾患を有することが避けられない。本演習では、数多い疾患の中でも脳やこころの機能と発達に関する疾患を取り扱う。高次脳機能障害、認知症、こどもからおとなまで各年代における精神疾患や悪性疾患にともなう精神面の変調などについて、科学的な視点から疾患論を教授したのち、文献研究を通してリハビリテーションやAssistive technologyなどの支援方法を自ら見出す演習を行う。				
到達目標	1. こどもとおとなの神経科学の各疾患について理解する 2. 文献研究を通して1. の各疾患の支援方法を検討することができる 3. 文献研究を通して、自らの研究の方法論を検討することができる				
講義方法	講義とアクティブラーニング				
アクティブラーニングの有無			あり		
備考					
成績評価 方法	評価基準・その他				
	基準：研究への取り組み、課題レポート、発表内容を総合して評価する				
テキスト	使用しない				
参考書	高次脳機能障害の作業療法（鎌倉矩子、三輪書店）、マインドフルネス&スキーマ療法1，2（伊藤恵美、医学書院）、マインドフルネス基礎と実践（貝谷久宣、日本評論社）、高次脳機能障害マエストロシリーズ（③リハビリテーション評価、④リハビリテーション介入、医歯薬出版） 脳のイメージング（ブレインサイエンス・レクチャー3）. 宮内哲, 他. 共立出版, 2016. 精神医学 第4版増補版, 上野武治（編集）. 医学書院, 2021.				
事前事後学習	事前：各回の担当教員が指定した課題の事前学習を少なくとも1時間以上行う。 事後：各回のテーマに関する文献を1本以上抄読する。				
オフィスアワー・連絡先			KMULASに記載されている科目責任者に事前にメールで問い合わせること。		
講義計画					
回数	学習内容			教員名（所属・講座）	
第1回	精神疾患の神経科学			吉村 匡史	
第2回	こどもの精神疾患の神経科学			吉村 匡史	
第3回	認知症・脳器質性精神疾患の神経科学			吉村 匡史	
第4回	精神疾患の病態における客観的評価			吉村 匡史	
第5回	評価技法から見た高次脳機能障害			種村 留美	
第6回	介入技法から見た高次脳機能障害			種村 留美	
第7回	高次脳機能障害のリハビリテーション1（アクティブラーニング）			種村 留美	
第8回	高次脳機能障害のリハビリテーション2（アクティブラーニング）			種村 留美	
第9回	リハビリテーションにおける神経心理学的評価とアプローチ			三木 恵美	
第10回	おとなのがんの神経心理学的評価とアプローチ			三木 恵美	
第11回	こども・AYA世代のがんの神経心理学的評価とアプローチ			三木 恵美	
第12回	地域でくらす高齢者の神経心理学評価とアプローチ			三木 恵美	
第13回	こどもとおとなの神経科学-ケーススタディ			三木 恵美	
第14回	こどもとおとなの神経科学-ケーススタディ			種村 留美	
第15回	こどもとおとなの神経科学-ケーススタディ			三木 恵美	

科目名	こどもとおとなの生活科学演習	科目区分	専門科目	開講年次	2年次
講義形式	演習	必/選	選択	開講学期	前期
開講 キャンパス	牧野キャンパス	担当教員 (カナ)	◎フカイ/フヨシ, カトウシロ, マツマカサエ, ナカマジュン		
単位	2	担当教員 (漢字)	◎福井信佳, 加藤寿宏, 松島佳苗, 中山淳		
講義概要	人々は生涯に渡り、さまざまな疾患や障害から生活障害を有する。本演習では、脳の障害、運動器障害、発達過程の障害に起因した機能障害や生活障害に対し、現在使用されている評価・測定方法について演習形式で学習する。各評価・測定方法を客観性・信頼性・簡便性等の面から、それぞれの評価・測定方法の利点と欠点を理解し、自らが研究対象とする領域、対象に応じた評価・測定方法を選択できることを目標とする。さらに、機能障害や生活障害に対し行われている国内外の評価・測定方法、治療・支援方法に関する先行研究に対し批判的吟味を行い、新たな評価・支援方法を創造する能力を育成する。				
到達目標	1. こどもとおとなの生活科学と関連する疾患・障害について理解する 2. こどもとおとなの生活科学と関連する機能障害・生活障害の評価・測定方法について理解できる 3. 自身の研究対象とする領域・対象に応じた測定・評価方法を正確に行うことができる 4. 文献研究を通して1. の生活障害の評価・支援方法を検討することができる 5. 自らの研究の方法論を検討することができる				
講義方法	講義と演習				
アクティブラーニングの有無			あり		
備考					
成績評価 方法	評価基準・その他				
	各授業における発表内容および授業内課題（レポート・レジュメ）にて評価する				
テキスト	使用しない				
参考書	文献等を適宜指示する				
事前事後 学習	各回の授業にあわせて事前・事後学習を行うこと。				
オフィスアワー・連絡先			KMULASに記載されている科目責任者に事前にメールで問い合わせること。		
講義計画					
回数	学習内容			教員名	
第1回	神経発達症児・者の生活障害			加藤 寿宏	
第2回	適応行動の障害と評価			加藤 寿宏	
第3回	社会性の障害と評価			松島 佳苗	
第4回	協調運動の障害と評価			加藤 寿宏	
第5回	感覚処理の障害と評価			松島 佳苗	
第6回	神経発達症児・者のリハビリテーション			松島 佳苗	
第7回	身体機能障害のリハビリテーション評価とアプローチ			福井 信佳	
第8回	義肢・福祉用具の評価とアプローチ			福井 信佳	
第9回	能動義手・筋電義手の適合と評価			福井 信佳	
第10回	装具の適合と評価			中山 淳	
第11回	上肢装具の製作1			中山 淳	
第12回	こどもとおとなの生活科学-ケーススタディ			福井 信佳	
第13回	こどもとおとなの生活科学-ケーススタディ			中山 淳	
第14回	こどもとおとなの生活科学-ケーススタディ			加藤 寿宏	
第15回	こどもとおとなの生活科学-ケーススタディ			松島 佳苗	

科目名	特別研究	科目区分	研究科目	開講年次	1年次・2年次
講義形式	演習	必/選	必修	開講学期	通期
開講 キャンパス	牧野キャンパス	担当教員 (カナ)	イタ ヒロカズ , タムラミ, イハシナリキ, フカイブ ヨシ, カトシヒロ, サウハルヒコ, イゾエ トメ, ヨシムラサツミ, カバシ ロウ, ムラタキ オ, アサツヨシ, ミキミ, マエザワ ヒトシ, フクモトヨシヒロ, マツシマカナエ, ナカヤマジュン		
単位	10	担当教員 (漢字)	飯田寛和, 種村留美, 市橋則明, 福井信佳, 加藤寿宏, 佐藤春彦, 池添冬芽, 吉村匡史, 中野治郎, 野村卓生, 浅井剛, 三木恵美, 前澤仁志, 福元喜啓, 松島佳苗, 中山淳		
講義概要	人間のこころとからだの健康に関する理解を深め、こどもから高齢者に至る生涯を通じた健康支援に関する研究課題を探索し、研究マインドを涵養しながら、先行研究、文献収集、調査及びデータ収集の上、研究計画を立て、論文を完成する課程について指導する。				
到達目標	1. 専門領域における先行研究、文献収集、調査及びデータ収集ができる。 2. 研究計画を立案し、計画に基づき研究を進めることができる。 3. 自身の研究についてプレゼンテーション及びディスカッションができる。 4. 自身の研究計画を遂行し、適切な論文を作成することができる。				
講義方法	講義と演習				
アクティブラーニングの有無			あり		
備考					
成績評価 方法	評価基準・その他				
	研究計画及び遂行能力（20％）、発表内容の発表・議論（20％）、修士論文の作成（60％）を評価する				
テキスト	使用しない				
参考書	指導教員が適宜指示する				
事前事後 学習	事前学習：講義前に与えられた課題について十分に準備した上で授業に参加すること。 事後学習：授業の内容が理解できるよう復習すること。				
オフィスアワー・連絡先			KMULASに記載されている科目責任者に事前にメールで問い合わせること。		
講義計画					
回数	学習内容			教員名	
	（第1回～第20回） 主指導教員の指導の下に、研究課題及び副指導教員を決め、教員の指導の下、研究課題を定め、研究方法及び研究デザインを踏まえた上で研究計画を立案し、研究計画及び研究概要について発表する。 （第21回～第40回） 研究計画に基づき研究を実施する。必要に応じて倫理審査を受ける。主指導教員・副指導教員の指導のもと研究の進捗状況を確認し、必要に応じて研究計画の見直しを行う。 （第41回～第60回） 研究を遂行し、主指導教員、副指導教員の指導のもと、必要があれば追加のデータ収集及び再解析を実施する。中間発表での指摘を受け、必要に応じて追加のデータ収集を行う。 （第61回～第75回） 研究結果について取りまとめ中間発表を行う。修士論文の成果として研究発表会で自身の研究について発表し、修士論文を完成させる。			飯田寛和, 種村留美, 市橋則明, 福井信佳, 加藤寿宏, 佐藤春彦, 池添冬芽, 吉村匡史, 中野治郎, 野村卓生, 浅井剛, 三木恵美, 前澤仁志, 福元喜啓, 松島佳苗, 中山淳	